

第1章

うちは惣領、うちはフガクを中心に幹部たちが、うちは総本部の隠し部屋に集まっていた。

「フガク様、北の警備所の件は本当ですか？」

「ああ、木の葉から決定事項として連絡があった」

「どうして我ら、うちは一族が担当している警備所に木の葉の者を派遣するのでしょうか。失礼極まりない」

「まあ、それだけ我が一族が信用ならんということだろう」

「フガク様、若者を中心にもう木の葉の横暴、うちはをないがしろに扱う態度に我慢が出来ないという声が上がっています。不平を抑えるのも限界が……」

「判っている。一度ガス抜きが必要だな」

「はい、決起までにはまだ準備が必要ですから」

「確かに、イタチから時期尚早という連絡が来ている」「フガク様の前で言いくいのですが……イタチからの情報もけて十分とはいえないかと……」

「暗部と言っても上層部の情報まで入りきらないだろう。うちは一族というだけで、重要な案件からは外されるみた

いだしな」

「ガス抜きという意味で、北の警備所の件は受け入れ、代わりにはたけカカシの写輪眼返還をあらためて木の葉に要求してはどうでしょう？木の葉に言われつばなしではない、言うべきことは言うのだという我らうちは上層部の姿勢を見せれば、一族内に向けてのパフォーマンスになり、血気盛んな者たちは多少落ち着くのでは。しかし現実には、過去に決着済みのカカシの写輪眼返還は、当然木の葉が断つてくるでしょうから、内々の代替え案としてあと一人、イタチとは別にうちは一族からの暗部入りを求める。イタチと二人なら、もう少し木の葉の情報も集めやすいのではないかと」

「そうだな。では代替え案を木の葉が了承する仮定で、暗部入りにふさわしい人物は誰がいるか？」

「ナギラあたりはどうですか」

「ナギラか……。確かに暗部でも充分活躍できる能力があるな」

「はい。若手の中ではイタチに迫る実力を持っております」

「ナギラに決起計画を明かすのか」

第2章

「いえ、最重要極秘事項ですから時が熟すまで知っている人間を無闇に増やすことは避けるが賢明でしょう。惣領息子であるイタチとは立場が違います。あくまでうちは一族の情報収集の一環として、木の葉の動きを把握してこいと伝えておきます」

火影執務室横の会議室では、臨時の長老会議が始まろうとしている。口火を切ったのは、うたたね小春。

「ヒルゼン、いや三代目よ。はたけカカシの写輪眼返還をうちは一族が正式に申し入れしてきたというのは本当か」
「はい」

「何を考えているのだ、うちはの者たちは。カカシの写輪眼については、7年前、野原リンによる移植の事実が判明した時点で当時の四代目がうちはと話し合いあい、解決済みではないか」

「北の警備所に木の葉のメンバーを入れたことに対する不満の表れで、まあ本気ではなく、こちらに向けてというよりうちは一族内へのパフォーマンスみたいなものですよ。言うべきことは言うのだと。向こうもそれが通るとは思っていないみたいで、代替え案も同時に言ってきています」

「それはなんじゃ？」

「イタチとは別にもう一人、うちはナギラという男の暗部

への入隊を認めてほしいと。互いに交流が必要でしようとの言い分です」

三代目の言葉に、それまで黙っていたみとかどホムラも口を挟む。

「ふん、イタチと二人で我ら木の葉の情報を集めようとしておるのだらう。イタチが既に我らの側につき、二重スパイになっておるのを知らぬからな」

うたたね小春も頷く。

「そういうことならその代替え案を受けておいて、こちらはイタチを通じて暗部に入隊するうちには当たり障りのない情報を流しておけばいいだらう。うちはが少しでもおかしい動きを始めたなら、例の計画を実行に移すまでじゃ」

三代目火影、猿飛ヒルゼンがうたたね小春の言葉に、一層険しい表情となる。

「あの計画は、可能な限り回避したいですが」

「それもこれも、うちのは出方一つであらう。万が一クーデターなど企てておればその前に潰すという計画であつ

て、何も動きがない場合に我ら木の葉側から仕掛けるとは言っておらん」

なおも難しい顔している三代目を見てそれまで沈黙を保っていた志村ダンゾウが言う。

「ヒルゼンよ。内戦となれば双方に被害が出る。お前が守らねばならぬのは、何より木の葉の里だらう。感傷に流されて道筋を間違えぬように、非情な決断であつてもせねばならぬ時はある」

第3章

「先輩、大丈夫ですか？」

「うーん・・・大丈夫とは言えないかも・・・」

「すみません。僕が不甲斐なくて・・・」

「何言ってるの。お前がいなけりやもつとまづいことになつてたよ。チャクラ不足は休めば回復するから」

「はい、あの木のところまで移動しますね」

そのあたり一体草原だったが、少し遠方の小高い丘に大きな木が枝を広げており、そこなら日差しも防げて休むにはちょうど良い場所であった。

「うん、周囲の見晴らしも良いな。悪いけど肩貸してくれる？」

テンゾウが両手を前に差し出して言った。

「何なら姫抱っこを」

「馬鹿」

テンゾウの言葉に苦笑しながら肩を支えて貰い、カカシは木の方向まで歩き出す。

二人は霧隠の忍びが木の葉を狙って、囁きの丘と呼ばれ

る場所に前線基地を構えているという情報確認の、第一次偵察に来ていた。今回は斥候としての任務であり、敵情勢確認後本隊を呼び寄せ、そこで初めて本格的に戦闘開始、敵壊滅という流れであったのが、情報があつた場所よりかなり手前で敵に遭遇、二人のみで戦わざるを得ない状況になった。おそらく当初の情報を流したのは敵スパイだったのだらうとカカシは判断したが、どちらにせよ準備のない状態で17歳になったばかりのテンゾウと二人で戦う事になった。流石にカカシに負担がかかり、敵は壊滅したが、チャクラ不足で動けぬ状況となっている。

木の根元にたどり着いてカカシを凭れさせると、テンゾウは地下水脈を探り当て、水遁を繰り出して地面から小さく水を噴き出させた。それを掬ってカカシに飲ませ、手拭いを濡らして顔や首の汗を拭き取る。

「・・・お前はどんどん立派になるね・・・」

カカシは自分で手足を動かすのも億劫な状態であり、甲斐甲斐しく世話してくるテンゾウにされるがまま、話しかける。

テンゾウはカカシの言葉に嬉しそうな笑顔を見せた。

「僕は先輩に早く追いつきたくて、それで努力しているんです。いえ、追いつくなんておこがましいけど・・・」

「テンゾウはいずれ里にとって重要な忍びになるよ」

自分を褒めてくれたカカシをテンゾウが見つめる。

「実は今は木遁で家を立てる練習をしているんです。これは結構難しく、建築の知識も必要になるので・・・。その技が完成すれば、カカシ先輩をこんなところで休ませたりしないのに」

カカシは木にもたれたまま、腕を伸ばし、指先をちょいちょいと動かしテンゾウを呼び寄せる。何かと顔を近づけたテンゾウの頭を撫で撫でした。

「お前可愛いな」

テンゾウはむすつとして答えた。

「子供扱いは嬉しくないです」

「ふふ・・・子供って言っていないだろ、可愛いって言ったんだよ」

テンゾウは子供扱いされて不貞腐れる気持ちと裏腹に、

カカシに触れたことで身体が熱くなるのを感じる。顔が赤くなりそうなのを悟られまいと、ふいつと横を向きながらテンゾウは言った。

「救援依頼の式を飛ばしてきます」

「ん・・・わざわざいいよ・・・少し休めば動けると思っけど・・・」

「でも、こんなところじゃなく、しつかりと休まない」と

「まあ、いずれにせよ回収班は呼ばないとな」

戦っていた場所にはまだ敵の亡骸がある。

「一緒に救援も呼びます」

子供じゃない、と言いたげにカカシの言葉に逆らうように、テンゾウは言い切る。

式を飛ばした後、しばらく二人で身を休めていたが、何かが近づく気配を感じテンゾウが立ち上がる。

「敵じゃなさそうだけどな・・・救援かも」

カカシも同時に感じており、言葉を発する。

「周囲を見てきますけど、木分身おいていきましようか？」

「いいよ、お前だって相当疲れているのに、今の状態で木

分身はきついでしょ」

「本当にいいですか……。じやとにかく見て、直ぐに帰ってきます」

テンゾウはその場を離れた。

カカシはテンゾウが離れ一層周囲に注意を払っていたが、明らかに敵ではない気配を感じ、やはり仲間の救援だったかと一息つく。

そしてその男は不意に現れた。

「お前がはたけカカシか……」

鳶の暗部面を被っている男が、木に凭れているカカシの前に立つ。

「救援の式をとばしたろう？」

カカシは頷いた。

「すまない……。チャクラを消費しすぎて動けない」

面の男が結界の印を結び周囲に張り巡らせた。

「その目は随分お前に負担をかけているみたいだな？
元々お前のものではないからな。うちはオビトから盗んだ代償か」

盗んだ、という言葉を使い、何故か結界を張ったその男をカカシは見上げた。男はゆつくりとカカシの前に膝をついて、同じ目線になる。

「札を言うのは早すぎたぜ、カカシ。俺はお前を助けに来たんじゃない」

そう言つて、男は暗部面を外した。

「えっ……」

カカシは現れた男を見て小さく声を上げた。オビトによく似た黒いくせ毛の髪、オビトによく似た瞳……。オビトが大きくなって成人していれば、こんな感じだったのではないかと思うような……。

オビト？ まさか……。まさかそんな訳はない。

「俺の顔になにかついているか？」

その男は、薄ら笑いを浮かべて聞いた。

「それとも、お前が殺したうちはオビトに似ているから、驚いているのか？」

「お前は誰だ？」

カカシは相手を凝視し尋ねる。

「俺はうちはナギラ。オビトの兄だ」

「うちはナギラ？オビトの兄？・・・オビトは一人っ子の
はず・・・」

「オビトは知らなかったんだ。実は俺も最近知ったばかり
さ。互いに従兄弟として育って、オビトは一人っ子だと思
っていた」

「従兄弟？ああ・・・それは聞いたことがある。2歳年上
の従兄弟がいてよく気が合うと・・・お前が、その従兄弟？」

「そう、それが俺だ。母親同士が姉妹で家族ぐるみで仲が
良かった。オビトが亡くなった時・・・叔母さん、つまり
オビトの母親が悲しみにくれるのは当たり前だが、俺の母
親はそれこそ叔母さんと同じくらい嘆いて悲しんで・・・

俺も悲しかったが、子供なりにおふくろの様子も気になっ
ていた。いくら仲が良くても実の母親みたいな嘆き方とい
うのは・・・」

ナギラと名乗る男は、語り始める。

「俺の暗部入りが決まって、おふくろからまた子供に先立
たれるのは辛いからくれぐれも気をつけてと言われて。ま

たって言葉が引つかかったよ。子供は俺と4歳下の妹だけ
で二人とも元気だ。またという言葉の理由を聞いたら、実
はオビトは俺の弟で、病気で子供が出来ない母親の姉の家
に生まれてすぐ養子に出したということだった。当時2歳
の俺はもちろん赤ん坊が生まれたなんて覚えていない。向
こうが本家で、分家の俺の両親は頼まれて断れなかったん
だろう。我が家には俺という跡取りもいたわけだし。オビ
トの家も気を使ってくれていたのか、おふくろが寂しくな
いように家も近くに住み、ほんとによく行き来していた。
従兄弟って言っても兄弟みたいに過ごしたよ。あの時・・・
7年前にオビトが死ぬまで・・・」

カカシはギリギリの体力で、何とか意識を保ちながらナ
ギラの話聞く。

「カカシ、俺は半年前暗部に入隊を認められた。だが、火
影はうちは一族を警戒しているのか、ずっと里外の警備的
業務ばかり割り当てられて、最近里に戻ってきたばかりだ。
そして組んだスリーマンセルのチームがたまたま待機所
にいて、お前たちの救援依頼の式を受け取った。これは偶

然だが、オビトが導いたのかもしれない。お前に復讐をするために」

「復讐・・・」

カカシはチャクラ切れの意識があまりはつきりしない中でその言葉を反芻する。

「そう、復讐だよ。オビトの育ての両親と、生みの両親である俺の親と、そして実の兄である俺はお前に復讐する権利がある。もつとも、うちのは幹部達からは厳しく注意されているがな。カカシに危害を加えれば木の葉との関係性は更に悪化するから、くれぐれも手出しはならぬと」

ナギラは口元だけで小さく笑った。

「うちは一族のプライドは高いが、忍びとしての能力を見極めるくらいのは冷静さはある。はたけカカシに危害を加えるなどという以前に、実際それは無理だという事も幹部たちは言っていたよ。お前に本気で反撃されたら、うちは大抵やり手の忍びでも勝ち目はないってな」

ナギラは右手をカカシの首筋にまるで締めあげるように当てる。そしてゆっくりと力を加えていった。

「一応言っておくが、俺は幻術使いだ。救援の式を受け取った俺の班のメンバーと、そしてお前の相棒には俺が作った幻術世界で迷子になってもらっている。今頃同じ景色をくるくる回っているだろう。念を入れて結界も張った」

ナギラが更に強くカカシの首を押さえつける。

「確かに普段ならお前の方が強い。でも今はどうだろう？お前は一人で、チャクラ不足で動けない。ここは俺の張った結界の中だ。多少でも俺に分があるんじゃないか？」

「うっ・・・」

ナギラに首を抑えられて、カカシは息苦しさにむせながら、逃れようと身体を振る。

するとナギラはあつさりと手の力を緩めたが、代わりにカカシの額あてをむしり取った。そしてチャクラ不足で今は力を発揮できないその紅蓮の写輪眼を見つめる。

「これがオビトの写輪眼か・・・。俺には結局写輪眼は発動しなかった。それなのに、どうして他人のお前がその瞳を持っているんだ？本当にオビトが自ら差し出したのか？オビトを見捨てて、野原リンと結託して盗んだんじゃないか？」

ないのか？」

カカシは小さく頭を振った。

「違う……違う……リンを悪く言うのはやめてくれ……」

「オビトがうちはの誇りである写輪眼をそうたやすく渡すものか」

「たやすくなんかない……。オビトは必死に託したんだ、この目と……リンを……」

「その野原リンも既に死んでいる。真実を知るリンを、お前が消したんじゃないのか？」

カカシはナギラの言葉に、リンが自らカカシの雷切を受けた日のことが蘇り、心臓を鷲掴みにされたような痛切な苦しさに覆われる。

「俺は……俺は助けたかった、オビトもリンも……」

「助けたかったといっても実際生きているのはお前だけだろう」

ナギラはいきなりカカシを殴りつけた。弾みで横倒しになったカカシの腹に、更に何度も蹴りを入れる。

「こほっ、こほっ……」

カカシは蹴られて激しくむせる。ナギラはそのカカシの髪を左手で掴んで引き起こし、右手を振り上げてまた殴ろうとしたが、ふと手を降ろした。

無理やり引き起こされたカカシはまだ少しむせている。

ナギラはカカシの口布を引き下ろした。チャクラ不足で蒼白い顔をしているが、元々も色白な肌には今しがたナギラが殴った赤みがくつきりとついている。

「復讐したい気持ちは常にあったが、一人ではかなわぬ相手と判っていたし、暗部になつても里外任務に出されていたし、焦りは禁物と自制してまずお前の情報を集めたよ。うちはでなくても、お前への反発分子がいれば協力体制が取れると思つてな。しかし、どいつもこいつもお前の事は皆褒めてばかりだ。天才だ、努力家だ、リーダー資質があるだ……」

ナギラはカカシの顎を掴んだ。

「それ以外に、ふざけた噂も聞いた。女のいない長期遠征でお前と一緒にいると、うっかり男色に走りそうな美形だと……。お前は強いから実行出来ないが、そうでなければ

ばきつと襲ってしまおうな。同性に欲情するなんてバカバカしいと思っていたが、こうしてそばで見ると確にお前はむさ苦しい男とは違うな・・・」

「・・・・・・」

カカシはナギラが言おうとしていることがすぐには理解できずに、無言で見つめ返す。

「仮にお前を殺したら、木の葉の里とうちは一族の争いに発展する可能性がある。俺も街の人々を巻き込むようなことは望んでいない。復讐と言ってもせいぜい気の済むまで殴るくらいしかないと思っていたが、それより・・・うちはのプライドの象徴である写輪眼を奪ったお前の、男としてのプライドを崩す方法があるな」

「え？・・・・」

カカシははつきりしない意識の中で、今一度聞き返す。

ナギラはクナイを取り出した。

「抵抗するなら本気を出すぜ。さっきも言ったが、今の以前の状態なら俺にも勝ち目はある」

「何を・・・・」

「殴るにはこっちも力が必要だ。今だってお前を殴った右手はそれなりに痛い。それより身体を穢す方が面白そうだってことだよ。天下のはたけカカシの身体をな」

自分を今から陵辱するのだと、プライドを崩すというのはこの身体を犯すことだとカカシも理解する。

「オビトの目を奪った代償だ」

「代償・・・・」

カカシは無意識にナギラの言葉を繰り返した。

「そう、盗人には罪を償ってもらわないと」

ナギラはそう言うとかカカシの忍服の襟にクナイの切っ先を当てた。

「切るのか？」

カカシの問いにナギラが唇の端でふふんと薄ら笑いを浮かべる。

「女みたいに優しく脱がしてもらえるとでも思ったのか。動くなよ、クナイが当たって身体に傷がつくぜ」

ナギラは一気にカカシの服を縦に切り裂く。乱暴な仕草で上半身の服を取り払うと、今度はズボンに手をかけた。

服を裂かれているというのにカカシは動けなかった。今はナギラが張った結界の中にいる。そこからチャクラを使い果たして動くことがままならない状況で逃げるのは簡単ではないが、相手は一人で、氣力を振り絞れば自分の実力で全く抵抗できないということはない。

それでもナギラの言葉とその容姿は、カカシから抵抗するという氣力を奪うには充分だった。オビトがあのまま成長してればこんな感じだったのだろうと思わせるその姿、ナギラは彼自身が言うように確かにオビトと血縁関係にあるのだろう。これほどの深い怒りをカカシに抱いているのだから兄というのもきつと本当で、オビトの育ての親、オビトの生みの親、それらの人々の嘆きをそばで見、感じて生きてきたのだ、この7年間。

そしてうちとしての最大の誇りである写輪眼が赤の他人であるカカシに組み込まれている。彼が怒るのは仕方がない……。何より、オビトの兄と戦いたくない。抵抗すれば、戦わざるを得なくなる。

逡巡している間に破られた忍服は剥ぎ取られる。チャク

ラ不足でまともに身体が動かない。オビトに似た容姿は心を乱す。カカシはほぼ無抵抗で全裸にされ、その身体を草むらに押し倒された。

ナギラが覆いかぶさり、動けぬように両手を押さえつけカカシを見下ろす。

「……他人の目のためにチャクラ不足とは、お前も厄介なものを盗んだな。気分はどうだ？三代目の信頼も厚く、火影の資質もあると言われているおまえが、こんな草むらで裸にされて、うちの男に今から犯される」

そう言つてナギラはカカシの乳首をいきなり強く捻つた。

「うつ……」

身体がびくんと反応する。カカシは朦朧とした頭で考える。オビトの兄が、弟を失った悲しみの代償を払えというのなら……。仕方がない。

「……痛いかな？身体は鍛えていてもここは別物か」
そう言つてナギラは更に強く捻り上げる。

「ああ……」

オビトの兄なら怒りも当然なのだ。

「いい声だ・・・。お前の痛がる様は俺の快感だ」

ひと時堪えれば、少しはナギラの、オビトの兄の怒りが
僅かでも癒えるのかもしれない。

ナギラは乱暴にカカシの身体を騷り始めた。両乳首を指
で捻り上げたかと思うと押し潰し、噛み、騷る行為を全身
の肌へと広げて噛み付くように吸い上げる。

カカシは愛撫というには乱暴すぎるその行為を、嫌悪感
に耐えながらそれでも逆らうことなく受けていた。どうし
ても・・・どうしてもオビトの血縁者というだけで、負い
目を感じてしまう。この瞳はオビトからの贈り物で、けし
て盗んだわけではない。しかし、助けられなかったという
負の感情がカカシを捉えて放さない。

片方の乳首を噛まれ、もう一方を指でぐいと捻られて、
カカシが痛みに耐えられずウツと首を仰け反らせた。

ナギラはふと顔を上げてカカシを見つめる。カカシは唇
を噛み、苦痛に耐えている。綺麗だと、整った顔立ちだと
噂されるその容姿でナギラの行為を耐えているその様に、

一瞬目が奪われる。無意識に手をカカシの頬に添え、その
唇に自らの唇を重ねた。カカシのプライドと身体を踏みこ
じるのが目的で、女相手のように口づけをするなど思っ
てもみなかったのに、ナギラはその衝動を抑えることができ
なかった。舌を入れようとしたが、カカシは強く歯を食い
しばり侵入を拒否する。

「口を開けろ」

バシンとナギラは激しくカカシの頬を叩いた。それでも
唇を閉じるカカシに更に二度三度と平手打ちを行う。

「開けろ！」

カカシはナギラの行為に抵抗する気力は既になかった
が、それでも無理やりな男からの口づけに思考より先に身
体の方が拒否してしまう。しかし何度も殴られ、意識が遠
のく。

ナギラは意識が薄れた状態になりやむなくあいたカカ
シの唇に再び口づけをする。そして舌を捻じ入れ、執拗に
角度を変えて口内を犯した。息が苦しくなったのか、カカ
シの手がナギラを押しつけるようにしたので、一度唇を離

し再び激しく平手打ちにする。そうしてナギラは思いのままにカカシの唇を、そしてその肌を蹂躪していった。噛み、捻り、カカシを犯すため自身の欲情を高ぶらせる行為を暫く続けた後、ナギラは一旦カカシの体から離れる。

医療キットから傷用の軟膏を取り出し、いきなりカカシの両足を左右に広げた。

男に犯されるとはどういうことか、もちろん知識として知ってはいるが、実際にその行為が行われようとしたその時には未知の恐怖が微かな抵抗の気力を生む。カカシは思わずナギラの手を振り払うように足をよじる。するともう何度目かもわからない鋭い平手打ちが頬を襲う。

「ここまで来て抵抗するなよ。いい加減にしないとその綺麗な顔が腫れ上がるぜ」

ナギラはカカシに覆いかぶさり、動けないように両手上から押さえ込んで見下ろす。

「オビトは岩の下敷きになったんだろう？それはお前も野原リンも証言している。13歳のあいつの苦しみは、今のお前と比べ物にならない」

ナギラがオビトによく似た瞳でカカシを見つめながら、心臓を切り裂くような鋭い言葉を紡ぐ。カカシの脳裏にオビトの最後の場面がフラッシュバックし、芽生えた微かな抵抗の気力さえ衰える。そう……。オビトの苦しみに比べたら、これくらいは我慢しなくては……。

「逆らうと余計に辛いぜ。後ろはバージンなんだろう？襲うには強すぎるはたけカカシ殿だからな」

「あ……」

ナギラがカカシの秘所に軟膏を塗りつけた指を捻じ入れる。

「あ……やめ……」

経験のない感覚に嫌悪感がカカシを襲う。

「女と違って濡れないから、滑りを良くしてやってるんだよ」

ナギラは指を増やした。それは、自分がこれから行う挿入がスムーズに出来るように狭い入口を押し広げているだけで、ただ乱暴に掻き回しカカシを苦しめる。

「うっ、あっ……」

「・・・もつと喚け・・・お前が苦しむと興奮する・・・」
ナギラは指を更に増やしかき回す。

「うう・・・」

ぐちゃぐちゃと押し広げてからようやく指を引き抜く。

「ああ・・・」

指で押し広げられていた状態から解放され、カカシは小さく息を吐いた。

「ほんとにバージンなのか、じゃあ結構きついかな」

ナギラはカカシのその様子を見ながら薄笑いを浮かべて言った。そして自身の下半身を露出しカカシの膝下をかかえて左右に広げる。

「いい格好だ、はたけカカシ。お前は今から足広げて尻から男を受け入れるんだぜ」

カカシはこれからくる衝撃に堪えようと自分の口を両手で抑える。

ナギラがカカシの秘所にいきり立った先端を振じ込み始めた。

「うっ・・・うああっ・・・」

気遣い無くカカシの中に一気に押し入る。

「狭い。バージンの女以上だな、これは・・・」

そう言いつつ、勢いを落とさぬまま奥へと進む。

「あーっ」

カカシは全痛覚がその箇所に集中したかのような激しい痛みに耐え切れず、口元を抑えていた手は身体の横の周囲の草を掴み、悲鳴を上げた。

「力抜けよ、入らねえよ」

「うう・・・」

「力抜けっつて」

ナギラはカカシの足を両手で更に押し広げて侵入する。

「うああ・・・」

「ほら、深呼吸しろ」

そうしてナギラは最後まで推し進めた。

「入ったぜ・・・動くぞ」

ナギラは一旦奥深くに入れ込んだものを、休むことなく今度は引き抜きはじめた。

「やめ・・・あっ・・・あー・・・」

「これは・・・マジやばい・・・」

肌の冷たさと違い、カカシの中は熱く内壁が異物を拒むように締めつけてくる。ナギラはねつとりと絡みつく経験のない快感と、はたけカカシを犯しているという征服心と加虐心、そして復讐を遂げる達成感などが重なり煽られ、自身のものが大きく食欲に熱を帯び、一層硬度を増していくのを感じる。

「う・・・頼む・・・頼むからゆっくり・・・」

身体を二つに裂かれるような破瓜の痛みと、それに慣れる暇もなく行われた動きに耐え切れず、カカシは思わず懇願する。

「まだゆっくりしろ」

「ああ・・・」

ナギラはカカシの中の行き来を加速していく。

「あつ、あつ・・・」

オビトに似た容姿の兄と名乗るナギラに向けられたむき出しの憎悪。そして伝えられたオビトの育ての親と生みの親の悲しみ。オビトもリンも助けられなかった後悔と無

念。チャクラを消耗した状態で殴られ蹴られ、無理やりに押し広げられた初めての行為。身体と心の両方から痛めつけられ、カカシの意識も思考も一層混濁していく。聞き入れられる可能性はなくとも、言葉が無意識に出てしまう。

「ナギラ・・・頼む・・・やめ・・・ああ・・・」

カカシに名前と呼ばれて、ナギラは腰にずっと衝撃が走った。動きたびにカカシは身体を仰け反らせ、苦痛に耐えきれずに両手は左右の草を引きむしる。殴りつけた頬は赤く腫れ、紅蓮の瞳も、もともとの蒼い瞳からも涙が溢れてその頬を濡らしている。散々乱暴に弄った乳首もその周囲全体が赤く染まっている。ナギラは再びその乳首に手を伸ばし捻り、押しつぶす。カカシは悶え苦しみ身体を振る。ぬけるような白い肌に、ナギラが噛み、吸い上げた痕が散らばる。

オビトの写輪眼を奪ったこの男をもっと苦しめたい、美しいこの男を無残に穢したい・・・もつと、もつと、もつと、自分の名を呼ばせたい・・・。

「う・・・ああ・・・」

カカシの悲鳴にも躊躇なく罰を与えるように何度も激しく杭を打ち込む勢いで行き来を繰り返し、ナギラは自身が果てそうになると一旦呼吸を整え、また抽挿を繰り返す。

ナギラにとって確かにカカシを苦しめるため、その身体とブライドを傷つけるために始めた行為だった。しかしいつの間にか、狭く締め付けるカカシの中を行き来する快感が全身を駆け巡り、それを追う事に夢中になる。突き上げるたび、引き抜くたび、噂通りの美しい容姿でカカシは辛そうに悶える。その姿は一層ナギラを焚きつける。

「ほら、もう一回頼めよ、止めてくれって」

「ああ・・・やめ・・・」

「この俺に頼め、名前を呼べ」

ナギラは激しく腰を打ち付けながらカカシに命令する。

「・・・う・・・ナギラ・・・やめてくれ・・・」

「そういうぞ、もつとだ、もつと頼まないと、終わらないぜ・・・」

ナギラの言うとおりにその名を呼び懇願することが結局ナギラの加虐心を煽り、更に自分の苦痛を引き伸ばして

いることに、朦朧とした意識の中でカカシは気づけない。

自分の名を呼び制止の懇願をするカカシはもうすでに、ブライドもそして身体も、ナギラが望んだように充分傷ついている。頭では理解しても、それでもナギラはすぐにはカカシを解放せず、颯その行為を可能な限り長く続けた。カカシの意識が薄れそうになると、ナギラは乳首をギュッと抓り、時には顔や腕、大腿、臀部、体中を激しく叩き、抓り目を覚まさせる。

暫く正面からカカシを犯していたナギラが、自身を引き抜き、カカシの身体を乱暴にうつ伏せにする。

カカシはほとんど意識がない状態で、そのまま草むらにぐったりと横たわる。

「起きろっ」

バシッ、バシッと臀部を叩き、腰を掴んで持ち上げると、後ろから押し入る。

「あうっ・・・」

カカシを貶め傷つけることが目的の行為に、意識を失うことすら許されずに苦痛の時間を過ごす。

ナギラ自身の体力と射精の自制が限界を迎えたとき、一層動きを加速させてカカシの内壁の最奥に熱を放出する。残滓まで注ぐように腰を打ち付け、その自身の行動に、名残惜しいのだと自覚する。そうして犯し続けたカカシの身体から離れた。

カカシは解放された姿勢のまま、指一本動かすことも無く横たわる。

ナギラも息が整うまで草むらにうずくまっていたが、やがて座り直してカカシを見下ろした。

頬には涙が伝う。白い肌は顔をはじめ、あちこちナギラが殴った痕が内出血し腫れ上がっている。その打撲痕の間を縫うように情交のしるしが散らばる。大腿には乱暴な行為で傷ついたカカシの秘所からの血液と、ナギラが吐精した白濁の液体が伝わっていた。

救援の式を受け取った時に画策した事とは違うが、結果的にはカカシのプライドを踏み躪ることになった、これは、はたけカカシが当然受けるべき罰で、自分は正しいのだと、酷すぎることはない、自ら行った行為がもたらした凄惨

な結果を目にして、ナギラは言い聞かせる。

カカシがあまりに動かないのでとうとう失神したのかと近づき、その肩に手をかけるとビクツと反応した。

意識があることに少し安堵し、ナギラは口元だけで苦笑いする。

「びくつくなよ。これ以上は、俺の体力も続かねえよ」

自分の身支度を手早く行いながらナギラは呟く。

「戻らないと、俺の仲間もお前の相棒もそろそろ幻術に気づき始めているだろう」

ナギラはそのまま一度去りかけて、一瞬迷いの表情を浮かべ、やがて忍具から防寒用のマントを出した。それを全裸のカカシの上にかける。そうして、ナギラはもう一度、カカシの唇を食る。

「判っているだろうな。これは俺個人の復讐だ・・・。ことを大きくすると、里とうちはの関係が悪化するぜ」

長い口づけから唇を離すと、ナギラはカカシの耳元に囁いた。

カカシはナギラの言葉を意識の遠くで聞く。

ナギラは結界を解除し、その場を去った。

遠くでテンゾウの気配を感じても、カカシはもう自力で動くことは叶わなかった。

テンゾウはまるで迷宮に迷い込んだように近くにあるはずの、カカシをもたれさせた木を見つけられずに焦っていた。誰かの幻術に陥ったと気づいたが、敵らしき気配は感じなかったことに不信を抱く。それなりの使い手による幻術らしく、解除出来ない。カカシはどうしているかと、心配で叫びたいほど焦り出したころ、不意に近くにカカシの気配を感じる。慌ててその気配の方向に向かい、横たわるカカシを見つけたが、一瞬それがカカシによく似た別人ではないかと思った。

その顔色は明らかに青ざめているのに頬は赤く腫れ上がって、涙のあとがある。髪は乱れ、地面に押し付けられていたかのようにあちこちに草がついている。そして苦しい時に人が何かを掻き集めるように、カカシの身体の横あたりの草はほぼ引き抜かれて、カカシの両指に草がまとわりついていた。

あのカカシが・・・いつも余裕で、いつも冷静で、誰よりも強く、鮮やかに華やかに敵を仕留めるカカシが、ロボロの状態でテンゾウが近づいても目を合わせようとせず放心している。

「先輩！」

テンゾウはカカシに駆け寄りその肩を抱きかかえて起こした。その時、マントの下が全裸であることを知る。

カカシの姿に驚いて周囲を見る余裕がなかったが、あらためて周りに引き裂かれた忍服が落ちているのを見つけた。

「先輩！これは・・・これは・・・」

マントはカカシの膝までしか長さがなく、そこから見えるカカシの足には新鮮な赤い血液が流れて伝わっていた。そして男の精液らしきものも。

何者かに襲われたということは判る。17歳になったばかりのテンゾウにも、ある可能性が頭に浮かびはしたが、まさかカカシが、という否定したい気持ちも沸き起こる。

まさかそんな、カカシ先輩が、強姦されるなんて、そんなことあるのだろうか・・・。第一誰に？自分が今しが

た迷い込んでいた事から、幻術使いの誰かということは想像できる。でもそれが敵なのかという点、どうにも合点がいかない。敵なら例えカカシを強姦したとしてもそのまま放置せず写輪眼を奪い後は殺すか、あるいは捕虜にして連れ帰り自国で尋問するだろう。そもそも敵は、先程自分たちが殲滅したのだ。

「先輩、一体何があつたんですか？僕が、僕が離れたばかりに……」

今にも泣き出しそうなテンゾウに、カカシはマントから左手を出してその肩を掴んだ。

「違うよ、テンゾウは悪くない……」

「でも、いったい誰が、先輩にこんな、こんな、ごう……」

テンゾウは言葉を飲み込む、強姦なんてカカシに言えない。おそらく間違いはないにしても。

「敵が、まだ敵が潜んでいたんですか」

「……」

敵かと問うテンゾウの質問にカカシは答えなかった。

「テンゾウ……戦闘で疲れているのは分かっていける

ど……負担をかけるのも判っているけど……」

カカシは息が長く持たないようで一且言葉を止めた。

「救援を待たずに、俺を連れ帰ってくれないか……」

「先輩……」

「頼む……」

カカシはテンゾウに抱きしめられたまま、その胸に顔を埋めた。

「頼む……」

カカシの二度目の言葉を聞いて、テンゾウは返事代わりにその体をギュッと抱きしめた。

言われなくても、救援を待つことはもう考えていなかった。カカシの気持ちを考えれば、この姿を他の誰にも見られたくはないだろう。もちろん後輩の自分にも。ただ、もうそれは仕方ないことで、カカシはあらゆる気持ちを耐え忍んで自分に頼んでいるのだ。

そして救援を呼ばないもうひとつの理由。敵がいたのかと問うテンゾウの言葉に答えなかったカカシ。もしかしてこの事態は味方の仕業ではないだろうか……。敵に襲わ

れたというより、そのほうが説明はつく。カカシの状況を考えれば、マントすら自分で出せないだろう。では一体誰がかけたのか、命を奪い合う敵と考えるのは無理がある。

自分が飛ばした救援の式で向かってきた味方の誰かが、チャクラ不足で動けないカカシを見て欲情し襲った、考えられる一番合理性のある状況。

守らねばと思う。事態はまだ完全には把握出来ていないが、安易に救援依頼し、しかもカカシから離れてしまった責任がある。それこそ命に代えても守りたい、守らねばという気持ちが始まる。

忍服を着ていないせいだろうか。マント越しに抱きしめているカカシの身体は、普段テンゾウが感じているよりずっと細く小さく感じた。

テンゾウは手拭いを取り出し、もう一度小さな水遁を繰り出し手ぬぐいを濡らした。カカシの足に伝わる汚れだけでも拭こうとほんの少し、マントをめくる。途端に心臓が大きく跳ねた。大腿は殴られたのか、蹴られたのか、内出血が広がり腫れて、その間を縫うように陵辱の痕が散らば

る。そして流れる血液。混じり合う精液。見えている首筋だけでもあちこちに情交の痕があり、マントから僅かに覗く肩のあたりだけでも、暴行の激しさが垣間見れた。

許せない……。怒りで全身が震える。気持ちを落ち着かせようと一度深呼吸をした。

「疲れているのにごめん……」

カカシが謝る。気を沈めるための深呼吸がため息に聞こえたのだろうか。テンゾウはこんな状態でも後輩の疲労に気を使うカカシが本当に切なく、愛しくてたまらない気持ちになった。体の上にかかっているだけのマントを身体に巻きつけるようにして、そっと横抱きに抱きかかえる。

「謝るのは僕です。先輩を一人にしてみました」

そう言っただけで立ち上がろうとすると、カカシの身体がびくついた。

足元を伝っていた血液の出処となっている場所が辛いのだろうとテンゾウは胸が痛む。一旦腰を下ろす。

「すいません。出来るだけ揺らさないようにしますの
で……」

カカシが小さく首を振った。

第4章

「俺は大丈夫、ごめんテンゾウ・・・ほんとに・・・」

何度も殴られて赤く腫れた頬を伝う涙のあとを、テンゾウはそつと指で拭った。テンゾウにされるがままに自分の胸に顔をうずめているカカシを見つめると、普段口布で隠れている薄ピンクの形の整った唇に、不意に動揺してしまふ。

テンゾウはカカシの唇を見て動揺した自分の心の動きに慄き、ふるふると頭を振った。

「・・・どうした?・・・」

カカシが微かに顔を上げてテンゾウに問う。

「な、なんでもありません・・・それで、すいません、先輩・・・ ゆっくり起きるので、少し我慢してください」

カカシは小さく頷く。そうしてテンゾウはカカシを大切に抱きかかえながら地を蹴り、木の葉へと向かった。

テンゾウも戦闘の後で疲労しており、更にカカシの負担を気かけながらの移動で素早くとはいかなかったが、時々休みつつ漸く里に戻った。そのまま病院にカカシを運び込むと、医療忍達の動きが慌ただしくなる。カカシはストレッチャーに乗せられて処置室の扉の向こうに連れて行かれ、テンゾウはぼつんと取り残された。本来三代目に直ちに任務報告に向かうべきだとは判っていたが、カカシの様子を知るまでは動きたくなかった。

長い時間待たされたのち、カカシがやはりストレッチャーに乗せられ、点滴を施されながら出てきた。そのまま入院するらしく病棟に向かったので、テンゾウがついて行くとうすると診察室の中から呼び止められる。

「ちよつと聞きたいことがあるんだが」

「はい?」

医療忍の中でもリーダー格らしい人にテンゾウは椅子に座るように手で促されて、従う。

「彼の症状はチャクラ不足だけではない」

テンゾウは黙って聞いていた。

「はつきり言おう。彼は強姦され酷く暴行されている。君が連れてきたが、どういう状況だったのかな？」

聞かれて当然だろう。もしかしてテンゾウが犯人であるかもしれないのだ。しかしテンゾウはそれに答えるわけにはいかない。というか、そもそもテンゾウ自身状況が判らない。

「我々は暗部隊です。全ては三代目に直接報告します」

テンゾウの言葉に、医療忍のリーダーは頷いた。

「判った。君たちの任務の秘匿性はもちろん我々も理解している。ただ、状況が状況だけにね。一応確認しておかねばと思ったんだ」

テンゾウは医療忍リーダーの言葉に頷く。そして今度自分が一番聞きたいことを尋ねた。

「あの、カカシ先輩は大丈夫でしょうか？出来れば見舞いに行きたいんですが」

「しばらくは面会禁止」

はつきりと医療忍に宣言され、テンゾウは仕方なく病院

を出た。元々暗部が入院する病棟は一般とは分けられている。それこそ存在自体が秘匿だからだ。危ない事も多い暗部に怪我はつきもので、病院に行くこと自体、むしろ正規部隊より多いかもしれないが、暗部担当の医療忍達もその点はプロとして患者のことを口外することはない。

出口を出て、暗部のものが入院する一番奥まった棟を見上げながら、テンゾウは三代目に報告に行かねばと思う。もつともカカシの件をどう言えがいいのか考えはまとまらなかった。犯人に対し、殺したいほどの怒りを覚えるが、おそらくカカシはそれを望んでいないだろう。結局このまま、うやむやになってしまいうのだろうか……。その犯人が仮に暗部内の人物なら、これからも顔を合わせることになる。カカシは火影に報告しそれなりの制裁を加える気はなく、自分の胸の内に収めるつもりなのだろうが、さぞ辛いだろうと思う。当初の任務そのものは本隊を呼び寄せることもなく無事に遂行したというのに、テンゾウは暗澹たる気持ちで、火影の執務室へ向かった。

「カカシはどうした？」

執務室に現れたのがテンゾウ一人で、三代目火影、猿飛ヒルゼンはその理由を問う。

「入院しています」

「また無茶をしておったか」

カカシのチャクラ不足による入院はさほど珍しいことではなく、三代目は冷静に尋ねる。

「火影様、お人払いをお願い致します」

カカシの状態から任務を当面休まねばならないことは明らかで、火影には真実を伝えねばならないが、周囲の警護にあたっている暗部メンバーには聞かせるわけにはいかない。カカシが強姦されたということを知られたくないのもあるが、犯人は暗部の者である可能性が高いのだ。

テンゾウの言葉に三代目はひよいと目線をあげ、そして手を横に上げて命令する。

「室内より全員退去」

シュツシュツと去っていく警護暗部。完全に他の者の気配がないことを確認した上でテンゾウは話し始めた。不可解なカカシへの陵辱事件を。

しばらくテンゾウの話しに耳を傾けていた三代目はおもむろに口を開く。

「では、お前の話では犯人は暗部の者と」

「はい。救援の式を飛ばした後ですし、カカシ先輩を襲うには相応の力を持つものでないと無理です」

「仲間内ならカカシが犯人の名を口にすることは一生ないだろう。あやつはそういう男だ」

「僕は・・・絶対に許せません」

「カカシを慕うお前の気持ちは判らんでもないが、被害を受けたものが訴えでなければどうにもならん。テンゾウ、男ばかりの任務も多い暗部内にカカシを性的な対象として見る輩がおることは否定せん。日常は実力者のカカシを心配する必要はないが、今後あいつがチャクラ不足になった時には・・・お前が気を配ってやってくれ。今回のことはわしが回復具合を見て一度カカシに尋ねるが、それで答えなければ犯人探しは不可能だろう」

第5章

入院して1週間経過した。病室内は自由に動けるようになり、カカシは部屋の洗面所で顔を洗っていた。タオルで拭き、鏡に映る自分の姿を眺める。頬の腫れはほとんどなくなつたが、殴られた跡の皮下出血が時の経過とともに青黄色く変色して、唇横から顎にかけて広がっていた。それは顔だけでなく全身も同じで、皮下出血は身体中にある。痛みはさほどには残っていないが、見た目は殴られた直後より酷くなっている。

「テンゾウが見たらまた自分のせいだとか言つてショック受けるだろうなあ・・・」

心優しい後輩を思う。病院に運び込んでくれた時も、ずっと僕がそばを離れたからだと謝つてばかりいた。テンゾウに何にも落ち度はないのに・・・。体調としては随分良くなつていたが、担当の医療忍に言つてもう少し面会謝絶ということにしておいてもらおうかと考える。面会に来られなければ、この姿を見られることもない。テンゾウが毎日、カカシの面会謝絶が解除になつていないか受付に聞き

に来ていると、親しくなつた医療忍から聞いていた。何て可愛い後輩なのかと思う。割合に自分を慕ってくれるものは多いが、テンゾウは本当に全身から慕っていますオーラを押し出して来る。伸びしろのある優秀な後輩に好かれていることは、素直に嬉しい。

木の葉病院内という、守られた空間の中で気を抜いていたカカシは、ベッドに戻つた時ビクツと扉を見つめた。医療忍ではない気配がすぐそこまで近づいている。

「よー、具合はどうだ？はたけカカシ」

うちはナギラが入ってきた。

カカシは上半身を起こし、侵入者を見つめた。

「どうして・・・俺への面会は許可されていないはず」

「確かに受付で止められた。でも、俺は幻術に関してはそこそこの使い手でね。推薦されて暗部に採用されているくらいにな。医療忍達にちよつと仕掛けさせてもらった」

そう言いながらナギラはカカシのベッドに近づき、そばの椅子にこしかける。

「美形も台無しの酷い顔だな。」

「・・・お前が殴ったからだろう」

「そりゃまあ、元々お前を痛めつけようと思つてあの場所へ行つたからな」

ナギラは椅子から立ち、目線を合わせるようにカカシのすぐ横のベッドの端に座り直した。

「お前、ずいぶん痩せたな。飯食つてないのか？」

「・・・熱が引かなくて、食欲がない」

「ああ・・・熱ね・・・それも俺のせいかもしれない」

ナギラの脳裏に、自分が犯したあと出血しながら倒れていたカカシが浮かぶ。

カカシはナギラを睨み返した。

「今更何の用だ？俺を痛めつける目的は達成できただろう？」

「・・・一度痛めつけたくらいではな。俺は・・・俺たち家族は7年間、オビトを助けなかつたお前を恨んでいるからな」

「恨み・・・」

カカシはオウム返しに呟く。その言葉はカカシの心を深

く抉る。

「これからの7年間、お前が俺の言うなりになるのなら、多少は気も晴れるかもしれないが」

「・・・え？・・・」

意味が理解できず、カカシは聞き返す。

「お前に出会うまで復讐したいと思つていた7年と同じ歳月の間、俺が望んだ時にはたけカカシの身体を自由に使わせろよ。そうすれば、俺もお前への恨みの気持ちを抑えるように努力するし、それ以後は何も言わない」

「俺の身体？・・・」

「お前はオビトの写輪眼を自由に使っているだろう？代償として、俺はお前の身体を自由に、抱きたい時に抱かせてもらう」

カカシはまだ完全に癒えていない身体に、破瓜の鋭い痛み感覚が蘇つた。オビトと同じ髪と瞳の色、全体の面影もよく似た容姿で、カカシは殴られ蹴られ、意識を失うことも許されずに嬲られ続けた。そして今再び残酷な言葉を口にするナギラを見つめる。

冷静な心で考える。断つていいのだと、全く理屈に合わない理不尽な話で、カカシが受ける必要はないことだと。チャクラ不足もある程度回復した今は、それこそナギラはこの部屋から叩き出すことだって出来るだろう。

しかし、もう一方の感情が沸き起こる。オビトを助けられなかった、リンを守る約束も果たすことが出来なかった。ナギラの言うように、これはこの状況は、代償なのだ、一人生き残った自分への戒めなのかもしれない・・・。

カカシはナギラを見つめる。オビトが成長したかのような男がそこにいる。オビトが、オビトが時を超え罰を与えにきたのだろうか・・・。傷つけられた記憶と相まって、正常な思考が崩壊していく。

カカシは震える声で呟いた。

「・・・任務に支障が出るのは困る・・・」

ナギラは一瞬意外な顔をして、そして薄ら笑いを浮かべる。

「それは、支障がでなければいいってことだよな」

ゆっくり手を上げて、ナギラは皮下出血の痕が残るカカ

シの頬に触れた。そのまま唇をカカシの唇に寄せる。

カカシは何ら抵抗せず、そのまま口づけされ、ナギラの舌が口内に侵入してくるのを受け止めていた。ナギラに陵辱された記憶が蘇り、身体中に走る嫌悪感に襲われながら、写輪眼の代償と言われれば、それが呪文のようにカカシを縛る。

ナギラはカカシに濃厚な口づけをし、更にカカシの首筋へキスを落とした。ねっとりとした耳朶を甘噛みするようにして囁く。

「契約成立」

その言葉を残し、ナギラは部屋を出て行った。

カカシは一人になって、自分の身体が小刻みに震えていることに気づく。両腕を自身の身体に回し、震えを抑えようとすることが止まらない。

身体を繋げられた時の激しい苦痛。その記憶も消えていないのに、オビトの面影を残すナギラにはどうしても逆らえない。

第6章

暗部待機所で、カカシはテンゾウと話していた。

「流石に先輩はブランクを全然感じさせないですね」

「ブランクって言うなよ。たかが一ヶ月だろ」

「はい、でも先輩が元気になってほんとに良かった」

テンゾウがニコニコとして話す。

今日はカカシが退院し、自宅療養を経たあとの復帰初任務だった。自分が元気になり任務に戻ったことより、こうしてテンゾウが喜んでくれているのを見られたことが良かったとカカシは思う。

「テンゾウ、今日一緒にご飯食べようか？」

「いいんですか？」

「うん、世話になったし、俺の奢り」

「うわ、ありがとうございます」

カカシはテンゾウを連れて待機所を出た。するとそこにナギラの班が帰ってくる場所に遭遇する。

報告はどうやら他の隊員達に任せたいらしいナギラが、鳶の面をつけたままカカシのそばに来る。

「カカシ、復帰任務は順調に終わったか」

「・・・」

カカシは言葉では答えず、小さく頷いた。

「俺も今日は終わりだ。今からお前んちに行かせるよ」

カカシはナギラを睨みつけるように見つめた。

「今から？」

「そう、お前の体調が戻るのを待っていたからな」

カカシは傍らのテンゾウを見る。

「今は用事があって・・・」

ナギラは露骨に不愉快そうな声のトーンで言った。

「何時ならいいんだ？」

断るという選択肢は無いという言い方に、カカシは言葉に詰まる。

「先輩、僕はまた今度でいいです」

カカシの困惑を見たテンゾウが言う。

「・・・いいのか？」

カカシの問いにテンゾウは大きく頷く。

「はい、それまでに食べたいもの考えておきますから」

「悪いな・・・。また今度」

カカシは氣遣いの出来る可愛い後輩に謝る。

「じゃ先輩、失礼します」

テンゾウはナギラにもペコッと頭を下げて出て行つた。

自分が優先されて当然と言うように、ナギラは悪びれることもなくカカシに言う。

「さつさと行こうぜ」

カカシは無言で歩き出し、ナギラが後を追つた。カカシの部屋につき、中に入るとナギラがいきなりカカシに口づけを仕掛けてくる。

カカシはそれを制した。

「任務帰りだ・・・。先にシャワーを浴びる」

「俺もだ。借りるぜ、それとも一緒に入るか？」

カカシはナギラを無視してシャワーへ向かう。熱い湯を浴びながら、これからのことを考えて襲う不快さに耐えようと気持ちを奮い立たせる。

カカシが出ると、代わりにナギラがシャワーへ向かった。

カカシは窓辺に置いているミナト班で写した写真を眺め

る。写真の中のオビトをしばらく見つめ、やがて伏せて置いた。ベッドに腰掛け缶ビールを飲みながら、今からでも拒否できるのだと考える。

ナギラが腰にタオルを巻いて出てきた。手には何か小瓶を持っており、ベッドサイドに置く。そしてカカシの飲んでいるビールを取り上げゴクリと飲んだ。

「お前も脱いでおけばいいのに」

拒否できるし、そうすればいいと一方では思うのに、カカシは今しがた眺めた写真の中のオビトの面影を残すナギラの言葉に従ってしまう。室内着を裾から持つて脱ぎ、ズボンのウエストに手をかけた。

入院生活で実戦から離れている間に一層白くなつたカカシの肌が顔になつていくのをナギラは無言で眺める。病院で見たとき瘦せた事に内心驚いたが、今もあまり体重は戻っていないようだった。胸の奥の更に奥、微かな罪悪感が擡げて来るのを否定するように、ナギラは服を脱ぎ終えたカカシの肩を掴み、ベッドに押し倒し、そのままの勢いでカカシに口付ける。やがて胸の突起にも手を這わし、コ

リコリと乳首を摘み、首筋から肩、胸へとキスの場所を移動していく。

「ん・・・」

両方の突起を、指と唇で摘んだり舐つたりされてカカシは小さな吐息を漏らす。

「堪えないで、声出せよ」

そう言いながら、ナギラは器用にカカシのものに右手を添える。緩々と梳き始め、だんだんと力を加えていく。

「ん・・・」

カカシは数週間前に自分を犯した相手から与えられる刺激にどうしても馴染めず、快感を拾えずにいた。

やがてナギラがカカシの秘所に指を回す。

かつての乱暴な挿入の記憶が蘇り、カカシは無意識にナギラの腕を掴んで阻止した。

ナギラはカカシの中の怯えを感じ取る。

「・・・わかつてる・・・。任務に支障がでないってのが契約の条件ってことはさ。今日は、無理矢理にはしない」

ナギラはそう言って、カカシの腕を離し用意していた小

瓶に手を伸ばす。指にたつぷりと小瓶の中のローションを絡めて、カカシの窄みに人差し指を入れた。

「あ・・・」

カカシの身体が僅かに強ばる。

「力抜いておけよ」

何度かローションを付け直し、指を増やして丹念に解かして行く行為を続ける。緊張を取ろうと空いた手でカカシのものを梳いてやるが、それは硬度を増すことはなく、唇を噛み、ただ不愉快な動きに耐えているという様子は変わらない。

ナギラ自身は、カカシに口付けた時から抑えきれぬ情欲が湧いていた。指に絡みつくカカシの内壁の感覚だけで先走りすら滴り始め、もうこのまま入れてしまいたい欲望が溢れる。しかし、準備をしなければまたカカシを傷つけ、この契約は無効になることは判りきっている。チャクラ不足で動けなかった前とは違うのだ。あの時のように無理やりなことをしようとすれば、カカシは本気で抵抗するだろうし、そうなれば自分など追い払うことは容易いだろう。

狭い入口も漸く柔軟性が感じられるようになり、ナギラはカカシの足を膝裏から持ち上げて左右に広げた。既に硬く上を向いている自身のものを窄みに宛てがう。そうして無表情を装いながらも微かな怯えを見せるカカシを見ながら、ゆっくりと挿入を試みた。

「あつ・・・」

カカシは小さな悲鳴を上げ、慌ててこれ以上の声を出すまいと、自ら手の甲を噛む。

ナギラはぎりぎりと挿入を続ける。ローションをたつぷりと付け、入口を解かすことに時間を割いたので、もちろん以前と比べてかなり入りやすくなっている。それでも、本来の機能とは違う役割を与えられたそこは、かなりの抵抗があった。

「うっ・・・」

ぐつと最後まで押し込むと、カカシが苦痛の表情を浮かべて呻いた。

カカシが目を開じ、自分の手の甲を噛んで痛みに耐えている姿を見て、これほどに準備をしても、慣れぬ身体はや

はりこの行為が辛いのだと思う。では、前回は・・・。何ら準備もなかっただひたすらにカカシを穢し、自分の快感だけを追ったあの時、カカシはどれほど辛かったのだろう。その強さを讃えられている忍びが、やめてくれと懇願するほどに・・・。

ナギラは腰を動かす。ついカカシの辛さを考えた自分を否定するように。これはカカシとの契約なのだ。オビトの写輪眼を使うカカシに代償を払わせているだけ。自分が罪悪感に囚われる必要はない。

「う、う・・・」

突き上げるとカカシは手を拳に握りしめて、更に強く自分の甲を噛む。

ナギラは繋がったまま一度動きを止めた。カカシの手をとり、カカシが自分で付けた噛み跡に唇を寄せキスをした。「声、我慢する方が辛いぜ、たぶんな。突っ込まれる方になつたことはないけど」

そう言つてナギラはカカシの両手を押さえ込むようにし、再度腰を動かす。

「あ、ああ・・・」

ナギラに両手を抑えられ、カカシは突き上げられても声を抑える術を失ったが、出すまいと力を入れることなく自然の反応に任せたほうが、確かに身体の方は幾分楽に感じる。裂けることも厭わずただ押し広げられた前回に比べると、痛みも確かに軽くなっている。

7年間、これから7年の間、望まれればこうしてナギラに身体を開くのだとカカシは思う。今はまだ辛い、いつか身体は慣れるだろう。そうして7年後、後悔と自責の念が少しは和らぐのだろうか・・・生理的とは言えぬ涙が湧き、目を閉じると溢れて流れていく。

ナギラはカカシを突き上げながら、溢れる涙を見つめた。押さえ込んでいた両手を離して、その涙を拭う。するとカカシが目を開けてナギラを見つめ返してくる。

泣き顔も綺麗な男がいるんだと、ついそんなことを思いながら、ナギラはカカシの膝下に腕を入れ、足を大きく開かせて最後の動きに入る。

急速に動きを速めると、カカシは身体をしならせた。

「・・・あ・・・ん・・・」

カカシの苦痛混じりの喘ぎで射精感が一気に煽られ、ナギラは押し付けるようにカカシの中に熱い滴りを放出した。

呼吸荒く、しばしカカシと繋がったまま息を整える。カカシは涙が溢れるその目を隠すように、両腕をクロスさせて顔を覆っていた。やがてナギラはカカシと繋がっていた所から離れ、そのクロスした腕を広げてもう一度指でその涙を拭った。

「・・・大丈夫か？」

「終わったなら、さっさと帰ってくれ」

カカシはナギラの質問には答えず言った。

「シャワーくらい使わせろよ。お前も・・・お前の後始末もしないと」

「自分で出来る」

「強情張るな、まだ慣れてないだろ。傷になってないかも見てやるから」

そう言うとなぎらはカカシの肩に手を回し、起こそうと

第7章

した。カカシはその手を振り払い、ズキッと身体の中心に響く痛み耐えながら自分で起き上がり浴室に向かう。

すぐ後をついてきたナギラがシャワーの栓を捻り、カカシの手を壁へつくように導く。

「始末してやるから、足開いて」

カカシは小さく深呼吸して、シャワーの雫の下、ナギラの言うとおりに壁に手をつき足を少し開いた。ナギラはシャワーで濡れた指をカカシの秘所に宛がい、自身が吐き出したものをかき出す様に二本の指を動かす。

「う・・・」

カカシは苦痛と羞恥の感情に耐えてその行為を受けていた。

「傷にはなっていない」

指を引き抜きナギラはカカシに伝える。浴室の明かりの下、今しがた自身が施した愛撫の痕が目立つカカシのシャワーで濡れた白肌は酷く扇情的で、ナギラは何かに導かれるようにその身体を抱きしめ、口づけた。

ようやく二人の時間が合い、次にナギラがカカシの元を訪れたのはそれから10日程過ぎてからだった。

「あ・・・ああつ・・・」

カカシをうつぶせにし、腰だけを高く抱えて後ろから突き上げる。

カカシは両手でシーツを握り締め、奥深く到達するとき耐え切れぬように首を仰け反らせる。

もう少し慣れたら快感を拾えるようになるだろうに、とカカシの苦痛を可哀想に想う気持ちの一方で、無駄のない筋肉と白く絹のような白肌を纏うその背中を穢したい衝動に駆られる。オビトは段々にストロークを大きくし、激しく責め立てて自身の猛り立つものでカカシを犯し続ける。最後は楔を引き抜き、カカシの背中めがけて白濁の液体を放出した。

行為を終え、自ら穢したカカシの背中を拭き取り、そのゴミを捨てようとした時、ふとベッド前の窓辺に伏せられた写真立てを見つける。初めてカカシの家に来た前は、

やはり多少の緊張もあり家の中の様子に気を配る余裕はなかった。本当にカカシは自分にその身を提供するのか、心変わりしない内に抱いてしまえというような焦りにも似た気持ちで、正直冷静さはなかった。

ナギラは手を伸ばし、写真立てを手にする。そこにはオビトと四代目とカカシ、そして野原リンと思われる女の子が写っていた。

ぐったりと横たわっていたカカシは、ナギラが写真立てを手にしたことに気づき、上半身を起こす。

「返せよ」

ナギラはカカシを見つめた。

「どうして伏せて置いてるんだ？」

「・・・例えば写真でも見られたくないだろう。こんなこと」

「お前・・・写輪眼は本当にオビトから貰ったんだ・・・」

「最初からそう言ってる」

カカシが答える。

ナギラは自分が間違っていた事に気づく。もし写輪眼を盗んだのなら、その相手の写真を飾ったりしない。カカシ

はその中に写る人々を、人間が一番リラックスするはずの自宅寝室に飾り、セックスを強要されている姿を見られたくないからと、わざわざ写真を伏せて置く程に大切に思っているのだ。

「やましいことがないなら、どうして俺の言うことを聞く？」

カカシは写真をナギラの手から取り返して言った。

「助けられなかったのは事実だから兄貴のお前が俺に怒るのは当然と思うし、オビトとの約束も守られていないから・・・」

「約束？」

「・・・リンを守ってくれと言われたのに、出来なかった」

カカシは写真の中のリンを見つめる。自らこの手に心臓を貫かせたリンを。

「お前は・・・オビトとそれ程仲が良かったのか」

ナギラは続きの言葉を心で呟く。約束を守れなかった罪滅ぼしに、その身を突然現れた兄と名乗る男に差し出すほどに。

カカシは写真立てを再び窓際に伏せて置きながら答えた。

「さあ・・・それは違うかも。喧嘩ばかりしてた」

「喧嘩？あいつは、オビトは親戚中でも一番明るくて皆に親切で、とても喧嘩なんかするタイプじゃなかったけどな」

「俺がその真逆だからだよ。周囲とは距離を置くひねくれた性格で、あいつとはぶつかってばかり」

「俺が暗部で集めた情報では、お前は心が広く仲間を見捨てない優秀なリーダーだっていうことだったけどな」

「・・・あいつと一緒に過ごしていた時はそうじゃなかった。でも今はもう、二度とオビトの時みたいな後悔はしたくないから・・・」

カカシは言いかけて、目を閉じ再びベッドに横になる。

「どうした？大丈夫か？」

「疲れた・・・」

ナギラは痩せた後、あまり体重の戻っていない様子のカカシの身体を見つめた。受け入れる側は負担が大きいのだろうと思う。そしてはつきりと理解する。写輪眼を盗んだ

と思い込み、自身が行ったカカシへの陵辱は、間違っていたのだと。身体中に後悔が駆け巡る。今すぐ謝って、そしてもう自分に従わなくて良いと言わなければいけない。そうすることが当然だと理解しているのに、それなのに、言い出せない。言ってしまうもうカカシの身体を抱くことができない。

横になり寝乱れているカカシの髪に触れ、それから首に、肩に、腕のラインをなぞるように指を這わせる。過酷な暗部の任務の合間の休息すべき時に激しいセックスを強要され疲れきっているカカシは、特に振り払うこともせず動かない。この髪に、この肌に、二度と触れることができない。それは耐えられない。いつの間にか溺れている、カカシの身体に。

真実を知っても、友を助けられなかったという自責の念を利用し、代償だと言って無理やりに身体を繋げる自分のずるさに吐き気すら覚える。それでもカカシを手放したくないという思いが、ナギラの心を支配する。

第8章

ナギラは内々で、うちのは幹部から先に暗部入りしているイタチと協力して木の葉の動向を探るように言われていたが、現実には里外の忍務が多く、イタチともすれ違いばかりであった。木の葉に警戒されている自覚と、うちからの密命を果たせぬ焦りは当然あったが、それとは別にカカシに中々会えぬ事が、ナギラの気持ちを苛立たせた。自分でも呆れるくらい執着しているのを自覚しながら、たとえ短くても時間が取れるときには身体を繋ぎ、だんだんと慣れて自分の行為にカカシが快感を得ているさまに喜びを感じた。

ある時、また里外任務を割り当てられ、出発前にどうしても会いたくてカカシのところへ行く。

ノックすると直ぐにカカシが現れる。

「なんだ、お前か・・・」

ナギラはカカシの家の玄関内に入った。

「歓迎されていないのは知っているが、それほど露骨に嫌な顔することないだろう」

「今から任務の打ち合わせにテンゾウが来るんだ。時間は無い」

「またテンゾウか、お前はいつもテンゾウテンゾウだな。この前もそう言って断ったよな」

「テンゾウとはツーマンセルを組んでいるんだから、当たり前だ。打ち合わせも任務のうちだから、当然優先する。お前との契約は、任務に支障がない事が条件だろう」

カカシは言うと同時にドアの外にテンゾウの気配を感じた。ナギラも感じたらしくドアを開ける。

「あれ・・・」

カカシが現れると思っていたテンゾウの前にナギラが居て、明らかに戸惑いの表情を浮かべる。

「テンゾウ、いいから入れ。そいつはすぐ帰るから」

カカシがテンゾウを見て、笑顔を浮かべて中に促した。

ナギラはカカシを見つめた。カカシはテンゾウという時にはよく笑う。自分が知るカカシの表情は、身体を開くときの辛そうな顔だったり、泣き顔だったり、そうでなければ無愛想で、笑顔は一つもない。もっとも自分がカカシに

行った行為を考えればそれも当然とは思うが、言いようのない苛立ちに襲われる。

「そう、俺はすぐ帰るから中に入れ」

ナギラはそう言つて、テンゾウを玄関内に招き入れた。と同時に、カカシを抱きしめ口づけする。

「・・・何する・・・」

カカシはぼつとナギラを押し返した。突然の出来事にテンゾウは驚いて立ち尽くしている。

ナギラはもう一度カカシを抱き寄せ、その耳元に囁いた。「キスくらいしても任務に支障はでないだろう？ 支障がない中で、お前の身体を自由にさせてもらう事が条件だったはずだ」

そう言つて、ナギラはカカシにもう一度口付ける。カカシは自分がかつて承諾した条件を言われて、仕方なくその口づけを受け入れる。

しばしカカシの口内を蹂躪した後、ナギラはようやく唇を解放し、テンゾウの方を見た。

テンゾウは目の前でカカシが男に口づけされている光

景にただ立ち尽くしていた。

ふん、という表情でテンゾウを一瞥し、ナギラは出て行く。

「ごめん、テンゾウ・・・野郎同士のキスなんて変なもの見せちゃったな」

カカシが謝る。

「いえ・・・」

「ま、とにかく入れ」

カカシはほうけた表情のテンゾウを部屋の中に招き入れ、自分は台所へ行きうがいをした後、冷茶を入れてテンゾウのいるリビングへ戻る。

お茶をテンゾウの前のテーブルに置くと、その肩が小刻みに揺れていることに気づく。

「テ、テンゾウどうした？」

テンゾウは泣いていた。

「いえ、びつくりして・・・」

「いや、確かに男同士のキスなんて気持ち悪いもん見せて悪かったけど、お前はびつくりすると泣くのか？ 普通悲し

い時とか、辛い時とか・・・」

「先輩のこと考えると嬉しいんですけど・・・よかったな
って・・・でもやっぱり辛くて・・・」

「嬉しい？辛い？なんのこと？」

テンゾウの言っている意味がよく判らず、カカシは質問
を繰り返す。

「先輩に、恋人が出来たことは嬉しいんですけど・・・で
も僕は辛い」

「恋人？」

テンゾウは涙を拭って顔を上げる。

「今の、素顔を見たのは初めてですけど、声からすると驚
面さんですよ。付き合っているんでしょ？」

「え、いや、あいつは・・・」

テンゾウは言いづらそうに話し始める。

「先輩、辛い目にあつたから、ほら・・・あの囁きの丘で・・・」

「ああ・・・」

「だから、先輩を守ってくれる人が現れて、良かったな
て・・・」

「はあ・・・」

自分を激しく陵辱し、助けられなかったとテンゾウを落
ち込ませたその時の犯人が、実は今の驚面、つまりうちは
ナギラとは言えずにカカシはテンゾウに聞く。

「俺に付き合ってる人が出来て嬉しくて泣いてるの？」

テンゾウは頭を振った。

「これは違います。悲しくて・・・先輩のことは良かった
と思うけど、僕は失恋したので・・・」

「失恋？」

「・・・すいません。変なこと言ってます・・・」

「いや、謝らなくてもいいけど」

「いつか・・・僕が先輩にふさわしい男になれば告白す
るつもりでした。同性だから尚更、好きという気持ちだけ
じゃなく、ちゃんと先輩に認めてもらえる存在にならな
ければ本気にしてもらえないと思って・・・。結局、間に合
わなかった。悔しくないって言ったら嘘になるし、今はシ
ョック過ぎてつい・・・」

テンゾウは手の甲でそっと涙を拭い、カカシを見つめて言

う。

「先輩にとって幸せな事なのに、泣いたりしてすいません。今だけ・・・次に会うときは絶対笑顔でおめどうと言いますから」

カカシは、心優しく暗部内でも一番信頼おける後輩の一杯の告白を聞いて胸がいつぱいになる。自分でも無意識のうちに手を伸ばし、テンゾウの肩を抱きしめていた。

「せ、先輩？・・・」

テンゾウはカカシに抱きしめられ驚きと戸惑いの声を出す。

「ありがとう、テンゾウ・・・お前に好かれる価値なんてないのに・・・」

「は？何言ってるんですか？先輩を好きな人は大勢いますよ。ただ僕はその中でも一番好きだって自信はありますけど・・・」

カカシはテンゾウの肩を抱いていた手を離し、顔を見つめた。

「嬉しいけど、今は俺と一緒にいる時間が長いからそんな

気がするだけ、一種の勘違いさ。そうのち、可愛い女の子と出会いでもあれば気が変わる。男の俺の事なんか考えもしなくなるよ。お前は優しいし、きつと愛される子は幸せになるだろうな」

テンゾウはカカシの言葉を聞いて厳しい顔つきになる。

「先輩以外の誰かを好きになる自分が想像つきません。忘れる努力はしなくちゃと思いますけど・・・。あの人、鳶面さん、あの先輩の幼馴染に似てますよね」

「ああ・・・」

テンゾウはカカシの写輪眼が移植されたものと知っており、その目の本来の持ち主が寢室の写真立ての中に写るうちはオビトだということも知っている。

オビトの面影を残していることが、より一層カカシの心を乱し、陵辱された相手と関係を続ける要因となっているのだ。

「似た人を恋人にするくらい、先輩の心を占めているんですね、オビトさん・・・」

「テンゾウ・・・」

カカシはナギラを恋人と勘違いしたテンゾウに対し、そ

第9章

れは違うと訂正しなかった。オビトに対する感情も誤解があると思つたが、それも否定しなかった。ナギラを強姦犯と明かさずにしても、恋人ではないと否定することは出来る。しかし、自分を好きだと言うテンゾウにはそのまま勘違いしておいてもらうほうがいい。早いうちに自分など忘れて、やがて女の子を好きになるだろう。そう思いながらも、カカシは信頼おける後輩からの告白に喜びが沸き起こるを感じた。つい無意識に肩を抱きしめてしまった程に。いつかテンゾウから愛されるまだ見ぬどこかの女の子が羨ましいとさえ思う。

そう思ったところで浮ついた気持ちをカカシは抑える。未来ある青年であるテンゾウに、自分はふさわしくない。

「木遁！木錠壁！」

「テンゾウ！前！」

「木遁！大樹林！」

約三ヶ月をかけてようやく実態が掴めた抜け忍が主体となっていた麻薬密売組織と大掛かりな戦闘態勢に入っていた。

テンゾウの活躍は見事で、カカシの心が読めるように行動し、次々と敵を仕留める。

カカシも敵と差し向かいながら、テンゾウのその動きに内心感心していた。19歳となり、独立して隊長を務めているテンゾウとは会うことすら久しぶりだった。そして今日はそのテンゾウの隊との合同任務で、その活躍を間近で見る。

しばらく見ないうちに本当に優秀な忍びになった・・・。

見た目も成長し、背も伸びて筋肉質な身体から果てしないパワーを持つ木遁を繰り出す。そうして、任務を終えたあとは、他の隊員達は先に帰らせチャクラ不足に陥っている

カカシの為に木遁四柱家を立てた。

「これは・・・」

驚くカカシを見てテンゾウは若干得意そうな表情を見せる。

「そのへんの安宿よりいいものではない？」

「うん、確かに」

「先輩の為に練習しました」

「俺の為・・・」

「さあさあ、入ってください」

テンゾウに促されてなかに入る。

「布団は用意できないので結局寝袋ですけど、それでも野宿よりはマシでしょう？」

言いながらテンゾウは手早くカカシが休めるように寝袋を広げ、部屋の隅をくり抜き水遁を繰り返して出した。手拭いを濡らしてカカシの汗を拭き取り、食事替わりの兵糧丸を差し出す。カカシがチャクラ不足に陥ると、テンゾウはこうして甲斐甲斐しく世話を焼く。しかもどんどんと進化を遂げ、こんな立派な家まで建てる能力を身につけた後輩に、

カカシは半ば圧倒されるようにただ従っていた。

促されるまま寝袋に入り、身体を休める。テンゾウと過ごす時間は、本当に心安らかにいられる。

「先輩・・・」

カカシが横になる場所に並行して自分の寝袋を用意しながら、テンゾウが話しかけてきた。

「ちよつと聞いていいですか？」

「何？」

「先輩・・・、幸せですか？」

「え？」

「鳶面さん・・・、うちはナギラさんと付き合い続けているでしょう。それで、先輩は幸せなのかと思って・・・」

「何故？俺不幸そうかな？」

「はい、不幸そうです」

少し冗談気味に答えたのに、テンゾウからはきつぱりとした答えが返ってきた。

「僕は、先輩が好きです。でも幸せなら諦めました。いえ、諦めようと努力しました。でも・・・先輩は鳶面さ

んが現れると、明らかに迷惑そうな様子です。この前も、暗部棟の近くで先輩を見かけて話しかけようとしたら、薦面さんが現れて……。すいません、見てしまったんですが、キスされてましたが明らかに迷惑そうで……。初めはいわゆる照れ隠し的なものかと思っただんです。でも……、先輩は薦面さんが去った後で、公園の水飲み場であいされてましたね」

「テンゾウ……」

「すいません、なんだかストーリーみたいですよ。ほんとその時は偶然だったんですが……恋人からのキスのあと、直ぐにうがいなんて普通はしない。僕はやっぱり先輩を好きなので、いつも目で追ってしまふ。そうすると不幸せそうな先輩がいる。もし好きでないなら、どうして別れないんですか？力づくで従わされているなんて事は、先輩の能力上ありえないでしょう？」

「お前はまだ俺が好きなの？」

カカシはテンゾウの疑問には直接答えず、質問を返す。

「好きです」

「前にも言ったが、暗部なんて閉鎖的なところで一種の錯覚起こしているんだよ。いい加減目を覚ませ」

「先輩に言われた通り、よそに目を向けましたよ。忘れるよう努力する一環で、女の子とも付き合いましたし……でも」

「でも？」

「どうやっても、何をしていても忘れられない。これから先、他の誰かを好きになることはあるかもしれませんが。でもそれは先輩の次、二番目に好きということですよ。僕の一番は永遠に先輩で、自分でも不思議なくらい、それは確信している」

以前にテンゾウの告白を聞いたときも胸がいつぱいになり思わず抱きしめたが、今も同じように胸が熱くなり泣きそうにすらなかった。

嬉しい……。この感情は、なんなのだろう。テンゾウの言葉に、震えるほどに嬉しさがこみ上げる。

「先輩……」

テンゾウがそばにより、横になっているカカシを覗き込

むように見つめた。

「本当に薦面さんを好きなんですか？僕は・・・僕の出る幕は一ミリもありませんか？先輩にふさわしい男になろうと、今までもこれからも努力し続けています」

「テンゾウ・・・」

カカシは無意識に近い感覚で、寝袋から手を出し、テンゾウの頬に添えて、自分の方へ引き寄せた。

テンゾウの言葉を嬉しく思うこの感情はきつと恋だ・・・俺もテンゾウに恋している。

テンゾウはカカシの手で引き寄せられるまま、顔を近づける。そうして唇が微かに触れ合った瞬間、もう頭がスバークしたように自分の行動を止めることは出来なかった。口づけから一気に舌を絡める。激しく口内を食りながら、寝袋のファスナーを下ろし、カカシのアンダーの下から手を入れ、素早く小さな突起を探り当てた。

口づけたまま、カカシが小さく反応したのが判る。テンゾウは自分によって、カカシの快感が引き出されている事が嬉しく、突起への愛撫を続ける。指の腹で優しく撫でた

り押し下ろしといった刺激をしばらく続けたあと、きゅつとつまみ上げるとカカシの身体が大きくビクツと反応した。弾みで唇が離れる。

テンゾウはそれを機に、一度体勢を立て直し自身の服を一気に脱ぎ去る。そして間髪入れず、カカシの服にも手をかけ剥いでいく。互いに生まれたままの姿となり、テンゾウはしばし均整の取れたカカシの筋肉と抜けるように白い肌のコントラストに見とれる。そしてゆっくりとその身体に覆いかぶさり、再び突起に手を伸ばした。

「あ・・・」

乳首に触れると、カカシが小さな声をあげる。舌と指を左右交互に入れ替えながら、乳首への愛撫を繰り返す。時折強めに摘んだり歯で甘噛みすると、カカシの身体がビクツと反応し、それを感じるたびにテンゾウの興奮も増してゆく。

「あ・・・ああ・・・」

カカシの声は麻薬のようにテンゾウの中枢神経に働きかける。夢中で口づけ、首筋に愛撫し、耳を甘噛みし、カ

カシの肌へ愛した痕を刻みつけていく。

テンゾウがカカシの大腿部を愛撫しながら後孔へ指を這わせた。

「あ……」

それまでテンゾウからの愛撫を抵抗することなく受けてきたカカシが一瞬びくつき、テンゾウの腕を押さえた。

「カカシさん……入りたい」

素直で真摯なテンゾウの言葉に、カカシは頷く。

テンゾウはさつき脱ぎ去った自分の服のボーチから傷用軟膏を取り出した。そしてカカシの両膝裏を抱え後ろの孔が見えるようにぐっと押し広げる。右手を膝裏から離し、軟膏をぐるりと孔周囲に塗りつけ、カカシを傷つけないようにもう一度軟膏をたっぷりと付け直して指を一本入れる。

「あん……」

思わず出た信じられないような自分の甘い声や、無防備な体勢の気恥ずかしさにカカシは耐えていた。そしてふと、ナギラを思い出す。受けている行為はナギラとそう大きく

変わるわけではない。それでも全く別物だった。愛するテンゾウからの愛撫は、カカシの中の快感を引き出し、思わず声を出してしまう。今こうして同性である男を受け入れるための準備も、いつもは屈辱のあまり早く通り過ぎるのをただ無機質に耐えているのに、テンゾウの指が行き来するたび、もつともつと、食欲に感じてしまう。

カカシの甘い声や感じる姿を見ながら、テンゾウはゆつくりと指を増やしていく。二本でぐるりと中を探ると、中指の腹にコリとした突起が触れた。そこを擦りあげるとカシの身体が大きく仰け反る。

「あつ……」

「ここ……いいですか？」

言いながら何度も擦ると、カカシの呼吸がどんどん荒くなっていく。

「あん……あつ……ああ……」

カカシの悶える姿は、テンゾウの限界を早める。もう抑えきれぬ先走りを滴らせながら、カカシの中に自身の杭を打ち込んだ。

「あ・・・ああ・・・」

カカシの声がテンゾウを更に高みへと引き上げる。

「カカシさん・・・カカシさん・・・好きだ」

ぐつと奥まで入れ込む。

「ああ・・・テンゾウ・・・」

カカシは無意識にテンゾウの背中に腕を回し、打ち込まれる杭の衝撃に耐える。

テンゾウは逸る気持ちを何とか堪えて、ゆっくりと動きを加える。カカシの反応を見ながら、決して苦痛ではないことを確認して段々と抽走を早める。

「あ・・・う・・・ああっ・・・」

テンゾウがぐいつと奥まで入れ込む時、カカシが仰け反る。ひどく扇情的に胸が持ち上がるような姿勢になり、テンゾウは繋がったまま、カカシの乳首を甘噛みする。

カカシはもうナギラのことなど考える余裕はなかった。ただひたすらテンゾウからもたらされる快感の波に身を任せる。

「あっ・・・あっ・・・」

テンゾウも既に脳内が既に真っ白になっていた。何年も、おそらく出会った時から惹かれていたカカシを、今自分が抱いている。カカシの中は狭く、出し入れするたびにテンゾウのものをギュッと締めて、信じられないような快感が呼び覚まされる。

口付けるたび、乳首や肌を愛撫するたび、カカシのそこは更に締まる。

「好きだ、カカシさん・・・」

夢中になるとはこのことだと、テンゾウは自分がいま直面している状況を思う。

「カカシさん、カカシさん」

叫ぶようにカカシの名を呼び、テンゾウは一層の動きを加える。

「ああ・・・テンゾウ・・・あん・・・」

カカシもまたテンゾウに揺さぶられながら、その名を呼ぶ。

テンゾウはカカシの中を何度も行き来し、動きを最大限に速めた時、最奥へすべてのものを注いだ。更にぐつ、ぐ

つと押し込みようやく嵐のような交わりから己の杭を引き抜く。

「はあ・・・はあ・・・」

呼吸が荒い。激しい戦闘よりもパワーを使った気がする。少し息を整えてカカシを見つめる。白肌にはテンゾウが付けた愛撫の痕が散らばり、胸周りは赤くなっていた。カカシもようやく呼吸が整い始めていたが、顔色は蒼白だった。テンゾウはそこでやっとカカシがチャクラ不足に陥っていた事を思い出す。だからこそ休息用に四柱家を建てたのに、カカシを想う感情のままに激しく抱いた。かつてカカシが強姦された時、犯人は2年経った今も不明だが、その時三代目からカカシを守るようにと言われた。にもかかわらず、これではあの時の強姦犯と変わらない。

「か、カカシさん。すいません、すいません。僕はなんてことを・・・」

「・・・なんで謝るの？」

「だって、チャクラ不足で動けないカカシさんにこんなこと・・・」

カカシは恐縮して自分を覗き込むテンゾウを見上げた。

「同意だろ。いや、謝るのはむしろ俺の方だ。俺のこと忘れるように言いながら、結局煽ってる」

「煽ってる・・・」

テンゾウは無意識にカカシの言葉を繰り返す。

「そうだよ。俺がキスしたくなった・・・それでお前を引き寄せた」

「カカシさん・・・同意だったって言ってくれるんですか？」

「だってそうだから」

「じゃあ僕の事をどう思っているんですか？好きだと、受け取っていいのですか？」

「テンゾウ・・・」

テンゾウの問は最もだった。

「僕を好きだと思ってくれているなら、ナギラと別れてください。彼はカカシさんを幸せにしています」

「テン・・・」

カカシは涙が溢れそうになった。ナギラとの契約は後5年残っている。若いテンゾウにそれまで待つてくれとは言

えない。そしてナギラとの契約は、話したところで理解されはしないだろう。自分でも不可解なのだから。オビトの兄と名乗り、実際その面影を宿しているナギラに逆らえない自分の感情。テンゾウは自分など忘れて、家庭を持つべき優秀な忍なのだ。

「ごめん・テンゾウ・・・」

「カカシさん、謝らないで、別れると言ってください」

「ごめん・・・」

テンゾウの望む答えを言うことが出来ず、カカシはただ謝る。

「カカシさん・・・どうして・・・」

「ごめん・・・」

テンゾウはもうそれ以上、カカシに話しかける事なく、黙ってカカシの身体を拭いて己の愛液の始末をし、乱れた寝袋を直した。

「テンゾウ・・・」

「おやすみなさい」

カカシの呼びかけに、拒絶するような一言の挨拶を返し

て寝袋に入る。

それから二人は互いに無言で夜を過ごし、そして翌朝何とか歩けるくらいまでには回復したカカシとテンゾウは、木の葉に向けて出発した。

テンゾウは無言だが、ゆっくりとしか歩けないカカシにずっと付き合い、途中岩を飛び越えなければならない箇所などはそっと手を差し出した。ただ、そんなときもカカシに言葉をかけることはしなかった。

第10章

テンゾウは火影に報告に訪れるその時まで、無言を貫いていた。

「そうか、ご苦労であつた。しばし休むと良い。特にカカシはだいたい疲れておるようだ」

報告を聞いた火影の言葉にカカシが答える。

「多少、チャクラを使いすぎましたが休めば大丈夫です」
カカシの顔色は今もすぐれなかった。テンゾウはカカシの疲労がチャクラ不足だけでなく、昨夜の行為のせいでもあるとわかつていた。しかし、今はただ無表情を貫く。

火影室を出たあと、テンゾウは昨夜から初めてカカシに話しかけた。

「家まで送ります」

テンゾウの言葉にカカシは微かな笑顔を浮かべる。

「ありがとう。でも、ここはもう里の中だし、俺の寮まで大した距離じゃないから大丈夫」

「本当に大丈夫ですか」

「うん。テンゾウ、もう話しかけてくれないのかと思った

よ」

カカシの言葉にテンゾウはきつとした視線を返した。

「同じ人に二度目の失恋をしたばかりで、しかも今回は心を通じていたのかと有頂天になった後で拒絶されたので、平然を装うにはさすがに辛いです」

「テンゾウ・・・」

「両想いなのだと、勝手に誤解した僕が悪いと充分わかっています。すいません。でも今は・・・失礼を許してください。お疲れ様です」

テンゾウは俊身でその場から立ち去った。

カカシはチャクラ不足とテンゾウに抱かれて気怠さの残る身体に、テンゾウの心を傷つけた痛みを胸に抱えて、重い足取りで寮へと戻った。

シャワーを浴び、ぐったりとしてソファで動けずにいるとドアをノックする音がする。ほんの一瞬テンゾウかと思つたが、直ぐに気配で誰か判る。カカシは一度小さなため息をついて、ドアを開けた。

「よう、カカシ」

ナギラがいる。カカシはナギラと長々と言葉を交わす気にはなれず、無視して部屋に戻る。

「待てよ。無視する事はないだろう」

「・・・今は任務帰りだ。お前の相手をするパワーはない」

「でも、任務は終わったんだろ。次の任務まで休めるなら、多少は平気だろう」

「勝手なこと言うなよ」

「チャクラ不足で本隊と離れて、帰還が遅れたことは聞いている。でも後は休むだけならいいじゃないか」

そう言う、ナギラはカカシの肩をぐいっと引き寄せた。

「やらせる。任務前じゃないんだから契約違反にはならない」

そう言つて口づけようとして、ナギラはカカシの首筋に残る赤い痕を見つける。慌てて指をカカシの襟にかけ、他の部分も見えるようにぐっと引く張る。胸元から見えるカカシの白肌には、明らかに愛撫の痕と思われる赤い模様が散らばっていた。

「お前・・・お前・・・これは何？」

「関係ないだろう」

カカシは襟を掴むナギラの手を振りほどいた。

ナギラは怒りの形相を浮かべて怒鳴る。

「誰かと寝たのか？ 答えろよ」

「だから、俺が何しようとお前に関係ないだろう。お前が望む時にはいつも相手してきた。それ以外の時間までお前に束縛される理由はない」

ナギラの顔が怒りから段々と今度は泣きそうな表情になる。

「カカシ・・・一体誰なんだ相手は？」

「やるのか、やらないのか？」

カカシはナギラの質問に答えず、事務的に訊ねる。

「タベ、そうだ。今回はテンゾウと一緒だったな・・・」

あいつか、あいつと一緒に休んで、あいつと寝たのか？ カカシはナギラの言葉を完全に無視して、ソファに寝そべる。昨日から続く疲労感で、座ることも億劫だった。しかしナギラがカカシの肩を掴み引き起こす。

「カカシ！ あいつ、テンゾウなんかのどきがいい。まだ十

代の餓鬼じゃないか。お前はあんな若造に抱かれて満足なのか？おい」

カカシは面倒そうに横を向いて話す。

「テンゾウは餓鬼なんかじゃない。優秀な忍に成長した。お前だって・・・それはわかってるだろう」

「やっぱりあいつなのか？あいつと付き合っているのか？」

カカシを問い詰めながら、その答えを聞かずにナギラは不意にカカシを抱きしめた。

カカシを失いたくない。ナギラははつきりと自覚する。カカシを好きだ。いつの間にか、身体だけでなく心まで囚われている。カカシと共に一緒にの時を過ごしたい。他の誰にも、奪われたくない。

「お前は俺のものだ」

ぎゅっと抱きしめられて若干息苦しさすら感じながら、カカシは答える。

「契約期間中はお前が望むように抱けばいい。でも俺はお前のものじゃない」

「カカシ・・・」

ナギラは意を決する。カカシがオビトとの思い出を大事にしていると知った時から言えなかった言葉。

「カカシ・・・。お前にどんな酷いことをしたのか、どんなに深く傷つけたのか、ちゃんと自覚している。しかもそれが俺の言いがかりで全く見当違いな恨みだったことも・・・」

「え？・・・」

「ずっとずっと後悔してきた。謝りたかった、でも出来なかったんだ、そうすればお前を失うから。お前の前から去らないといけなくなるから・・・。俺は・・・俺はお前が好きだ」

「ナギラ・・・」

ただずっと恨まれているのだと、本当に写輪眼の代償を求めて身体を要求しているのだと思ってきたナギラの意外な告白に、カカシはさすがに驚く。

「お前が好きだ。頼むから一生かけて償わせてくれ。お前のそばにすることを許してくれ。カカシ」

「ナギラ・・・」

「嫌われているのは分かっている。それだけの事をしたのだから・・・。だからこそ、どんなに勝手といわれても・・・そばで償いたい」

嫌われているというナギラの言葉に、カカシは少し考える。確かに酷い暴力を受けて強姦された。更に理不尽な要求をされて、その後も身体を繋げている。でも、そのことは、心のどこかで仕方がないと受け止めているのだ。オビトの兄ならば、弟の死に関係している者を恨むのも、自身には写輪眼が発動しなかったうちは一族ならば、その目が赤の他人に使われている事を怒るのも、仕方ないと。

「嫌いじゃない」

「え？」

カカシの言葉にナギラはぎゅっと抱きしめていた手を緩めてカカシの顔を見る。

「俺はお前が怒るのも仕方がないと思っていた。だからこそ契約を断らなかつた」

カカシはナギラの頬に手を添えた。

「嫌ってなんかいない。心底嫌いな奴と何度もベッドで過ごしたり出来ない」

カカシはナギラの目を見て言う。

「でも、お前に恋愛感情はない。俺にとってお前はオビトが気が合うと言っていた従兄弟であり、そして兄貴なんだ。だからこそ嫌いにはなれないし、争う気もない」

ナギラは一層辛そうな表情になる。

「お前は・・・やっぱりオビトが好きだったのか？」

カカシはナギラの問いに一瞬の間を置き、小さく息を吐いてから静かに言葉を紡いだ。それはナギラの問いへの、明確な答えではなかったが、カカシにとって、それがすべての答えだった。

「・・・前も言っただけど、生きている間は喧嘩ばかりしてた。俺はいつも、失ってからその大切さに気づいて後悔ばかりしている」

ナギラは再びカカシを抱きしめた。

「オビトの代わりでもいい。お前のそばにいたい」

抱きしめられながら、カカシはもう一度静かに答えた。

「・・・契約期間は残っている。俺の身体なら今まで通り自由にすればいい。でもそれだけ・・・。心は無理だ。」

カカシは自分の心にも聞かせるように言葉を選ぶ。好きという心は、遅しく優秀な忍びに変化を遂げた後輩に向いている。オビトやリン、父やミナトのように二度と会えないわけではないが、彼の気持ちを酷く傷つけ、そして慕ってこれているその気持ちを失った。やはりテンゾウと共に過ごす時間は戻ってこない。

「昨夜の相手はテンゾウだろう？テンゾウがお前を好きなのは判っているが、まさかチャクラ不足で動けないお前をあいつが襲ったのか？・・・」

ナギラが聞く。

「まさか。あいつはそんな奴じやない。テンゾウは俺とお前が恋人として付き合っていると勘違いしている。俺なんか忘れて、いい恋愛をして欲しいと思っているのに、あいつが優しすぎて・・・昨日は俺の心の籠が外れた」

ナギラはようやく気づく。

「そうか。お前もあいつを・・・。お前らは両想いで、俺

がお前を解放すれば晴れて付き合えるということか」

「付き合うつもりはない。あいつの人生を壊すようなことはできない」

「テンゾウがお前に惚れているのは誰が見ても判る。俺が契約を無効にすれば・・・でも・・・」

ナギラは更に苦悩を浮かべた表情のまま、唸るように話した。

「俺は最低な人間だ。どんなに卑怯と言われても、お前を離せない」

ナギラはそう言ってカカシの頬を両手で掴むように押さえて、いきなり舌を絡めるくちづけを仕掛ける。カカシの衣服を脱がせてもつれるようにソファに押し倒し、その肌に残る、おそらくテンゾウが残した愛撫の痕跡を消し去るように、新たな愛撫の痕をつけていく。

「あ・・・あ・・・」

乳輪ごと揉み込むように乳首を摘まれ、あちこちの肌への刺激を受けながら、カカシは恋愛とは違うナギラへの気持ちを考える。

第11章

しばらくは看護忍に肌を触れられる時ですらびくつほど、酷い目に合わされた。契約がある限り、こうして身体を提供しなければならぬ。でも、テンゾウと付き合えないのはナギラとの契約のせいだけではない。幸せになつて欲しいからこそ自分など忘れて、女の子と家庭を持てばいいと思つてゐる。そしてナギラもまた、自分に恋してゐると言う。自分がナギラに恋することは有り得ない。誰もが報われぬ想いに囚われて、傷つきあつてゐる。

「あつ……あつ……ああ……」

「カカシ……好きだカカシ……」

何度も角度を変え、何度も姿勢を変えながら行き来し、叫ぶようにカカシへの想いを言葉に乗せて、ナギラは果てる。

「卑劣さは自分が一番分かつてゐる。でも、お前は離さない」

ナギラはカカシに告げて口づけをし、出て行つた。

そして、カカシがナギラを見たのは、それが最後となつた。

緊急に呼び出され、その現場に着いた時はさすがに百戦錬磨の暗部たちも、一応に驚きを隠せなかった。

うちは一族殲滅。

しかも犯人は同じうちは一族で暗部の一員でもあつたうちはイタチ。唯一の生存者であつた彼の幼い弟が間違いないと証言した。

父も母も、全ての人を兄が殺したと。

その凄惨な現場の処理は、正規部隊でなく暗部が任された。カカシも現場の指揮としてその場に派遣されたが、かつて自分の隊の部下でもあつたイタチの行動に驚き、そして木の葉の里の上層部の動きに不可解さを感じてゐた。

どうして優秀な暗部を遺体搬送に回すのか。直ぐにイタチ捕獲へ駆けつけなければならないはずなのに。

「カカシさん」

あれから任務も違い、暗部棟ですれ違ふことがあつても言葉を交わすどころか、目すら合わせなかつたテンゾウが話しかけてきた。

「カカシさん・・・大丈夫ですか？」

「何が？」

「いえ、体調とかは？」

「うん？そりや驚いているけど、そんなの誰だって一緒だろう」

「じゃ、言いますね。僕の班は西区を担当しています
が・・・先程うちはナギラさんの遺体を見つけました」

カカシの動きが一瞬止まる。思考も身体も僅かの時間停止した後、微かな声を出す。

「え？」

「我ら暗部の一員で、うちは一族のナギラさんの遺体です。
間違いありません」

「そうか・・・」

非番だったのか。なんと巡り合わせが悪いのか。暗部の仕事で里外へ出ていることはよくあるのに・・・。そこでカカシはまた奇妙な思いに囚われる。イタチとナギラ、うちは一族からの暗部はたったの二人。そのうちの一人が犯人で、一人がよりによつて非番で村に戻った時に起きた事

件。これは偶然か？

「カカシさん」

テンゾウがそつとカカシの腕に触れる。

「大丈夫ですか？辛いなら休んでください」

「俺は大丈夫だ。でも・・・この件はどうも不可解だ・・・。
テンゾウ、少し互いに情報を集めよう」

第12章

カカシは、テンゾウの部屋で小さめだが作りの丈夫そうな木の座卓の前で座っていた。

「コーヒーはブラックですか？」

「ああ」

テンゾウがカップの載った盆を持ち部屋に来る。

「今日、ようやく鳶面さんの班と、虎面さんの班がイタチ討伐に出発しましたね」

カップを置きながらテンゾウが話しをする。

「うん・・・遅すぎるけどな」

「ですよ」

テンゾウも座り、カカシの方を向いた。

「上層部の事件に対する反応の悪さから、何か裏があるとは思いますが、僕の範疇では、結局掴みきれませんでした。」

「ああ」

うちは事件のあと、情報を集めてだの、被害の全容を明らかにしてだのと、イタチ討伐を先延ばしにする三代目の

歯切れの悪さにカカシは直接話しをしたこともあるが、明確な答えは得られなかった。数日が経ち、ようやく討伐隊は出されたが、優秀なものだけを集めた暗部隊の中でも、更に精鋭と言われるカカシ班とテンゾウ班が外されていることは、さすがに他の暗部たちも不思議に思っていた。

「それで三代目は何と？」

「何も言わない。結局真相は判らない」

「ナギラさんも・・・」

テンゾウは一度言葉をきり、改めて話す。

「ナギラさんも、よりによって非番の日に・・・」

「それも不可解で調べた。うちはへのことづてを頼まれてわざわざ戻ったという話もあるが・・・結局、それも誰からの依頼とかは判らなかった」

「そうですか・・・うちは一族が揃うように仕組まれた可能性もあるってことです」

ナギラについて気を使っている様子のテンゾウに、カカシは静かに話しかける。

「うちは事件の真相以外にも、お前と話がしたくて、今日

はここへ来たんだ」

「はい？」

「そのナギラのことだけど、俺たちは付き合ってたんかいなかった」

「え？でも・・・」

「お前、2年前の事件覚えてるか？俺が・・・俺がレイプされてお前に助けてもらった・・・」

話がナギラのことから、突然過去の事件に飛躍したので、テンゾウは戸惑いながらも答える。

「それはもちろん。あのことを忘れるのは無理です。僕の大失敗で、一生の後悔でもあるから」

「あの時の犯人が、ナギラなんだよ」

「え？・・・ええっ？い、今なんて・・・」

「お前も言ってたとおり、ナギラは俺の写輪眼の本来の持ち主のオビトに似ていただろう。あいつは血の繋がった兄弟貴らしい。事情があつて従兄弟として育ったけど」

驚いて口をあけたままのテンゾウの前で、カカシは淀みなく話す。

「弟を殺して写輪眼を奪ったって、あいつは信じていて俺に復讐するため現れたんだ。俺を殺せば里との抗争に発展するからそうじゃない方法、尊厳を傷つけるといふか・・・。写輪眼はうちは一族にとってプライドそのものだから、一族でない俺が使っていることも怒りだったんだろうな。レイプ以後も、写輪眼を使用する代償だと言つて身体を要求されていたよ。だから、あいつと付き合っているようにお前には見えたと思う」

「な・・・なんですって・・・身体を・・・」

テンゾウの顔が蒼白になる。

「どうして、どうしてそんな馬鹿げた要求に従っていたんですか？叩きのばせばよかったじゃないですか！」

怒りで段々とテンゾウの声が大きくなる。

「カカシさん。どうして！」

カカシは微笑んで答える。

「どうしてかな・・・。自分でもよく判らない。ただ、オビトに似た顔で写輪眼の代償を払えと言われたら、逆らえなかった。身体を自由に使う契約は7年。オビトが死んで

から、あいつに出会った時までの時間分。でも結局、2年で終わったな」

「2年も・・・2年もあの強姦犯に・・・」

テンゾウは今も忘れられないあの時の凄惨な光景を思い出す。全身内出血と陵辱痕の肌、流れる血液と精液、苦痛の涙を流していた蒼白なカカシ・・・。

「最初はさすがに辛くて・・・。あいつと寝た後、よく吐いてたよ。でもそれはレイプされた時のトラウマの問題で、抱かれるのは本当に苦痛だったけど、あいつ自身は嫌になれなかった」

「どうして・・・どうして嫌いになれないなんて・・・あんな酷い目に合わされたのに」

「そう、それはそうだけど・・・。ナギラも本当はいいやつなんだよ、弟思いの。最後に会った時、俺が写輪眼を盗んでいないことに気づいていたって言っていた。でも俺を好きになって、そばに居たくて取り消すことが出来なかったらしい。謝ってくれたよ、レイプのことも一生かけて償いたいって・・・」

「そんな、ただの身勝手じゃないですか。クソ・・・悔しい・・・」

テンゾウが握りこぶしをブルブルと震わせる。

「僕が殺せば良かった・・・。僕がイタチより先に、カカシさんをあんな目に合わせたあいつを、この手で・・・」
カカシはブルブルと怒りで震えるテンゾウの手に自分の手をのせた。

「テンゾウごめん。お前が怒ると分かっている話してる」

「カカシさんにも、僕はあんな失礼なこと言ってる・・・本当は苦しんでいたのに・・・」

「怒ると分かっていたから、話せなかった。お前に仲間を傷つけて欲しくなかったし、ナギラが傷つくのも嫌だった。あんなやつでもオビトの兄貴だから・・・。一族と共に殺されたと聞いて、この前は大丈夫だと言ったけど、実は参っている。それも含めて、お前に正直に言いたくてさ」

「先輩・・・」

カカシは穏やかに言葉が続ける。

「・・・俺たちの任務は命と向かい合わせだ。ナギラも死

んだ。俺はいつも失ってからその大切さに気づいて後悔ばかりしている人生を送ってきたから、だから今は正直に言う。俺はお前が好きだ。いつからなんて判らないけど……。

あの時、木通四柱家でお前に抱かれた時は、ナギラとの契約が残っていたし、お前には可愛い女の子が似合うと思っていた。でも……もう後から言えばよかったという後悔だけはしらないと思って」

テンゾウは、今度は呆けたようにカカシの言葉を聞いていた。その様子を見てカカシは言葉を続ける。

「俺はずっとナギラに抱かれてた……。その事実は消しようがない。こんな俺でも……テンゾウ、まだ好きでいてくれるか？」

テンゾウは驚きと嬉しさが交じり合う混乱した頭で、ようやく掠れる言葉を振り絞るように言う。

「もちろん……もちろんです。僕は一生、先輩が一番ですから」

カカシがテンゾウの肩に腕を置く。それが合図のようにテンゾウはカカシに口付ける。

テンゾウの部屋のカーペットの上で、二人は獣になる。

愛撫を全身に施し、秘部を十分に指で溶かし、テンゾウがカカシの中に身体を落とす。角度を変えて擦り上げると、カカシは髪を振り乱して悶える。ハスキーな低音で甘い声を出す。愛撫すると白肌がほんのりと桃色に色づく。乳首を摘むと、内壁が締め付けてテンゾウを一層煽る。自分を見つめ返す瞳は熱く熱を帯びて、より深く奥へと誘う。

夢中になる。

「カカシさん、カカシさん……」

カカシを揺さぶりながら今は亡きうちはナギラのことかテンゾウの頭をよぎる。復讐からいつの間にかカカシに恋をし、一生かけて償いたいと願ったという。このカカシを見ていたなら、それは手放したくなくなるだろう。既にこの世からいないとしても、カカシへ行った行為を許して許せはしないが。

「あん……あ……ああ……」

テンゾウは動きを加速させる。カカシの中を幾度も幾度も往復し、擦るように奥へ奥へと突いていく。

「あ……ああ……」

「カカシさんっ」

「ん……テン……ああ……」

抱えているカカシの両足をぐつと自分に引き寄せ、最奥へ熱を放つ。

「あっ……ああっ……」

カカシは涙が溢れてくるのを自覚する。激しく貫かれた生理的なものか、強姦された上に2年も黽られた相手とはいえ、オビトの面影を残すナギラとの別れが辛いのか、自分でもわからない。

共に果て、テンゾウがカカシからゆっくりと身体を起す。

「大丈夫ですか」

カカシの涙は自分の行為のせいだと疑わないテンゾウに対し、黙って頷いた。

「すいません、夢中になりました……」

テンゾウはカカシの涙を指で拭い、優しく口付けた。

第13章

カカシはその日テンゾウの家に泊まった。真夜中の静寂の中、自分の横で小さな寝息をたてているカカシを起こさないように、テンゾウはそっとベッドを抜け出す。

僅かな期間に、不可解なうちは事件、ナギラの死、そしてカカシのレイプ事件の真相の告白とさまざまな事が起こり、身体は疲れているのに神経は過敏となり眠れない。

カカシが好きだと言ってくれたことは、自分の人生を揺るがす大事件で、先程は夢中で彼を抱きしめたが、それは『今生きている人間の中で』という但し書きがつく。しばらく時間が経過し、改めて考えるとその但し書きが何より神経を逆撫で、過敏にさせていることに自覚せざるを得ない。

吐きながら強姦犯に身体を提供するなんて、まともな思考を見失っているとは思えない。チャクラ不足の時ならともかく、それ以降は同意しての行為なのだから。第一、最初のレイプの時でもカカシ程の実力者があそこまで無抵抗に痛めつけられるとは考えにくい。

オビトの兄であり面影も似ているという理由で、それだけで心が還っていく。彼が大切にしている時代に。過去に引きずられている時、彼の精神は危うく脆くなっていることに、聡明な彼が気づいていない。

カカシが寝返りをうつ。

テンゾウはそばに近づき、ベッドの端に腰掛けてカカシを見つめた。

任務中は小枝が落ちる僅かな音にでも敏感なカカシが深く眠っている。それだけ自分のそばが安心出来る場所となっていることは嬉しい。でも……。

時間の経過と共に角度が代わり、僅かなカーテンの間から月明かりが差し込む。柔らかな月の光は、銀色のカカシの髪を艶やかに輝かせ、美しい顔の輪郭を明確にする。

でも……。自分は彼にとつて一番ではない。テンゾウは狂おしい想いに心が乱れる。

カカシを愛するということは、過去に対する彼の脆い精神も含めて背負わなければならない。自分はそれに耐えることが出来るのか。いつか彼や彼の周囲を酷く傷つけて

しまうのではないだろうか……。今ですら、ナギラをこの手で殺したかったという感情を捨てきれないのに。それともいつそ彼の目の前でこの命を差し出せば、彼の心に永遠に住み続けられるのではないか。

ああ、そうか……。

狂おしさで思考は混沌とし、深淵の闇に落ちていく。

そうだ、自分だけ、あるいは彼だけを傷つけなくてもいい。二人で一緒に旅立てばいいのだ……。そうすれば、こんな狂おしい想いと向き合わなくて済む。

テンゾウは月明かりに照らされたカカシの首筋にそつと両手を添える。力を込めようとする意識と、躊躇する意識がせめぎ合う。

「……どうした……。テンゾウ……殺らないのか……」

カカシが目を開じたまま静かに聞いた。

「カカシさん……」

テンゾウはハツとし、カカシの首筋から手を放す。

カカシがテンゾウを見上げて、それからそつと起き上がった。

「直ぐに殺らないのなら、お前に殺される理由を訊ねる時間くらいはあるのかな」

「カカシさん・・・すいません。僕もあとから逝くつもりで・・・どうしても、どうしてもあなたが好きで、好きで・・・

自分だけのものにしたいくて」

「お前だけのものになったつもりだったけど」

「でも・・・僕はあなたの一番じゃない」

「どうしてもそんな風に思う？」

「あなたはいつでも生きている人間より過去を大切にしている」

「え？・・・そんなつもりは・・・いや、でも、お前はそんな風に思っていたのか・・・」

「あなたには自覚がないんですね。だから余計たちが悪い」

テンゾウは涙を浮かべて頭を小さく振る。

「すいません・・・混乱して・・・酷い言い方をしているのは判っています」

「テンゾウ・・・。謝るのは俺の方だ」

テンゾウの背中に手を伸ばしそっと抱きついた。

「俺はお前が好きだ。そばにいたいと思ってる。でも・・・お前をそんな風に追い込むくらいなら、殺されても構わない」

テンゾウは自分に抱きつくカカシの鼓動を聴きながら、少しずつ落ち着きを取り戻す。そして改めて思う。それでも否定はしないのだと。お前は間違っている、俺の一番はお前だよ、とは言ってもらえない。

テンゾウは小さく息を吐いた。

「すいません・・・。色々重なって取り乱しました。カカシさんは・・・たつた今あなたを殺そうとした僕でも、まだそばにいたいと言ってくれるんですか？」

「そう思っているよ」

「またあなたに手をかけたくなるかもしれない」

「だから・・・その時はその時で構わない」

テンゾウが好きだと、その思いに嘘偽りはないとカカシは改めて思う。そばにいたい。でも自分でもどうしようもない過去への拘りが、同時にテンゾウの心を傷つけている。

ナギラと寝ていた事実も、内心許せるものではないだろう。若き青年に寄り添いたいと願った代償ならば、この命を差し出しても構わない。生に執着はない・・・。

テンゾウはもう何も言わず、カカシを抱きしめ、ベッドに横たえる。口づけをし、耳朵を噛み、乳首に指を這わす。

再び彼の白肌に情痕を刻みながら狂おしい感情と戦う。彼の心に巢食う過去への激しい嫉妬心。いつそ自分だけの世界に連れて行きたいという欲望。あるいは彼の目の前でこの命を差し出せば、彼の心に永遠に住めるのではないかという願望。それらの醜い感情と向き合っていく。そうなのだ、それが、はたけカカシを愛する権利と引換えに自己へ課せられた代償。

二人は共に意識が朦朧とするその時まで、激しく絡み睦みあった。常軌と狂気との狭間で、これからも度々訪れる深淵の闇に攫われてしまわぬよう、互いに互いを繋ぎとめるかのように。

終わり